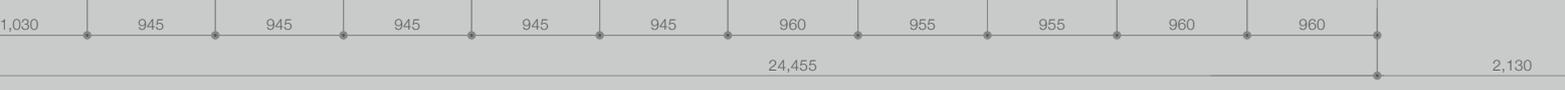
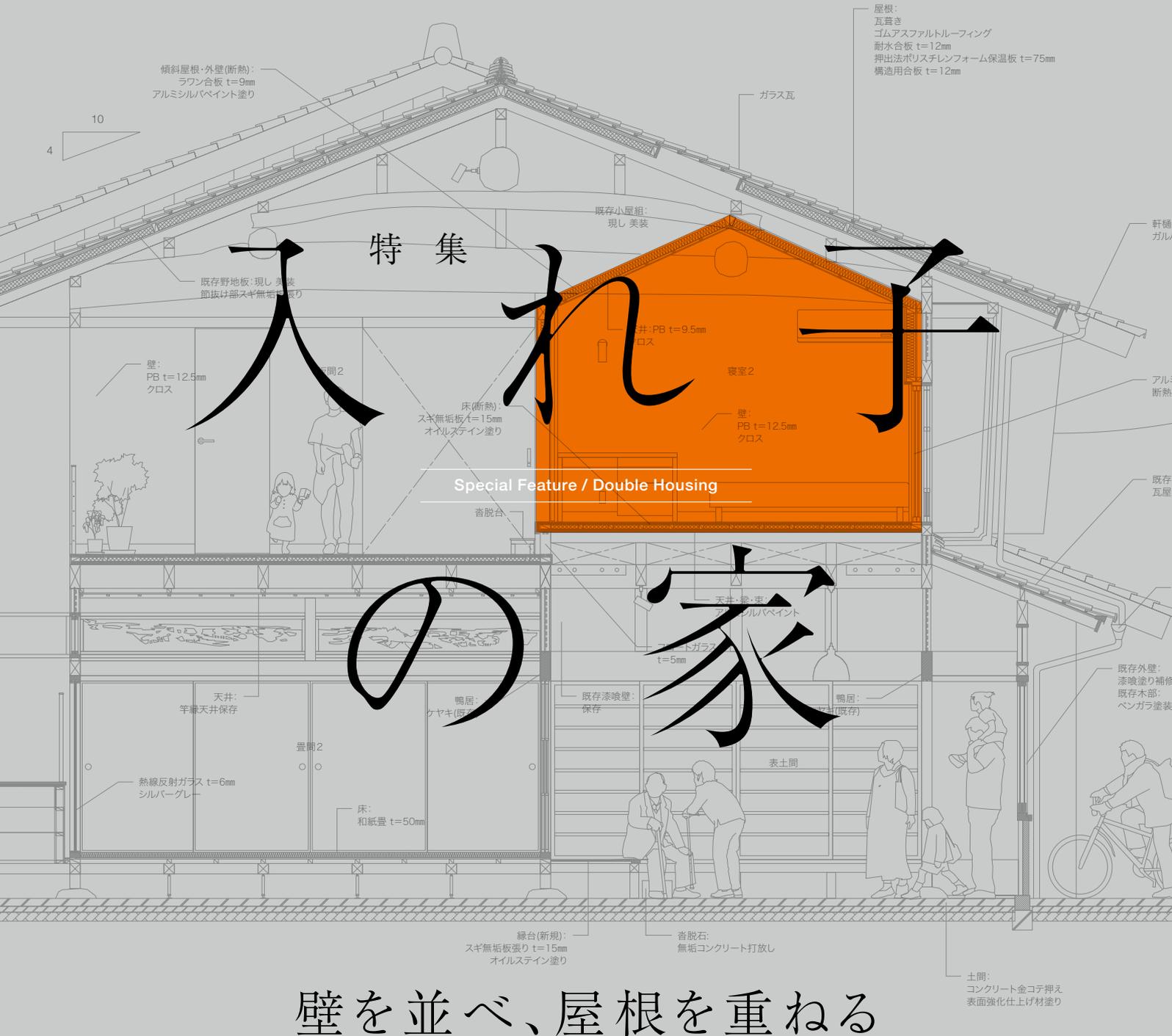


通信

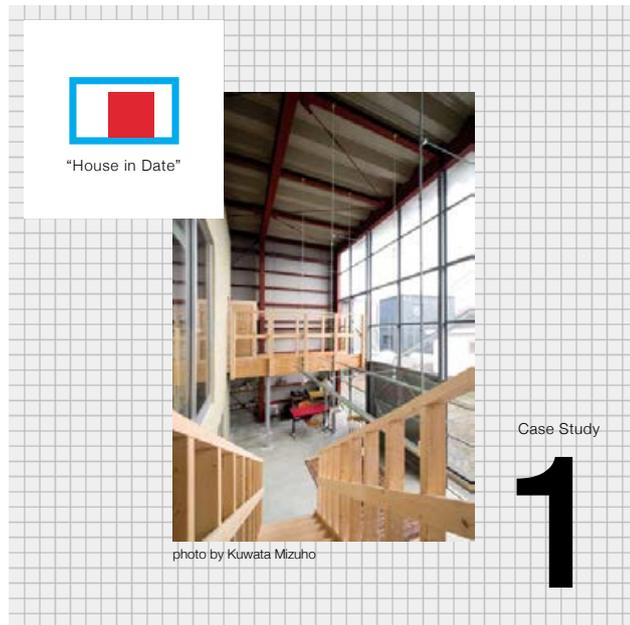


壁を並べ、屋根を重ねる

Special Feature / Double Housing



ハウス・イン・ニュータウン



伊達の家

青木弘司+能作淳平	4
設計/青木弘司	10
設計/能作淳平	18
設計/大井鉄也	26
設計/三宅正浩+吉本英正	34

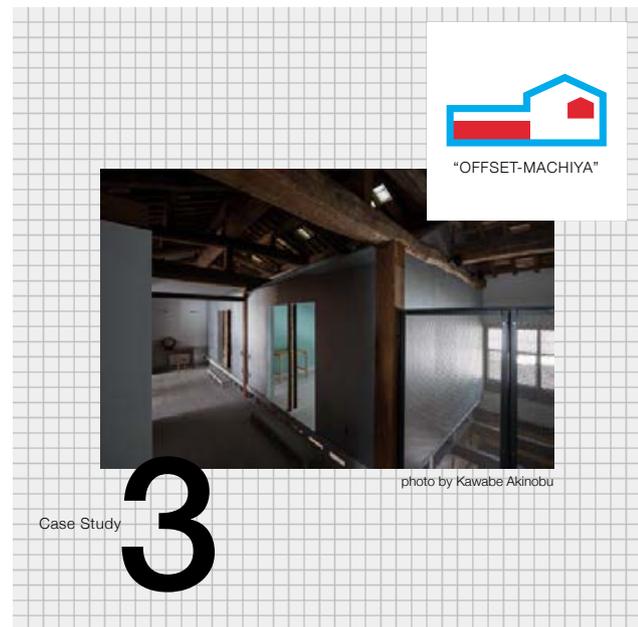
シリーズ	
旅のバスルーム104	文・スケッチ/浦 一也 メトロポール(ベトナム・ハノイ) 42
現代住宅併走40	文/藤森照信「去風洞」 設計/西川一草亭 44
最新水まわり物語46	日比谷パークフロント 50
地域に生きる会社75	アイレストホーム 54
新商品開発物語	コンパクト多機能トイレパック 56
TOTOギャラリー・間で展覧会をします	平田晃久展 60
Discovering New	
News File	TOTO News, Cera Trading News, Books 62

特 集 入 れ 子 の 家

箱の中に箱、そしてさらに箱。
入れ子というと、やや観念的な印象を受けるかもしれない。
しかし、実用的なところもあるのではないか。
内側の箱は、外側の箱に守られているから、
時には暖かくもなるし、プライバシーの確保にもつながる。
壁がふたつあれば、たとえば厚い断熱層と薄いシームレスな境界とに、
役割を分けることもできるだろう。
今までひとつだったものを分けてみることで、
新しい表現や、多様な住まい方が見出せるのではないか。
強い幾何学的な形式にとらわれることなく、
素直に入れ子のメリットを考えてみたい。



雨やどりの家



オフセット町家

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 518
Spring 2018

インタビュー それぞれの箱の役割を分ける

ケーススタディ1 壁の中に生まれた空間 「伊達の家」

ケーススタディ2 地域コミュニティを、屋内に誘う 「ハウス・イン・ニュータウン」

ケーススタディ3 古い町家の中に、新しい小町家を挿入 「オフセット町家」

ケーススタディ4 小屋の上に、大屋根をかける 「雨やどりの家」

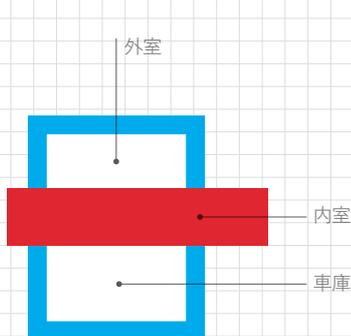
「TOTO通信」を
インターネットで
ご覧いただけます。

→ <https://jp.toto.com/tsushin>

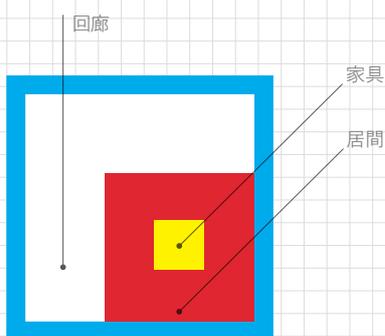
Special Feature
Double
Housing
Interview

Aoki Koji + Nosaku Junpei

の役割を分ける

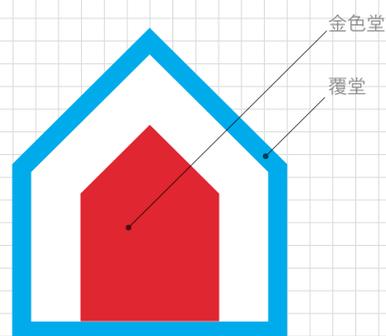


F3 HOUSE



反住器

Anti-dwelling Box



中尊寺金色堂

Konjikido in Chuson-ji

青木 弘司

Aoki Koji

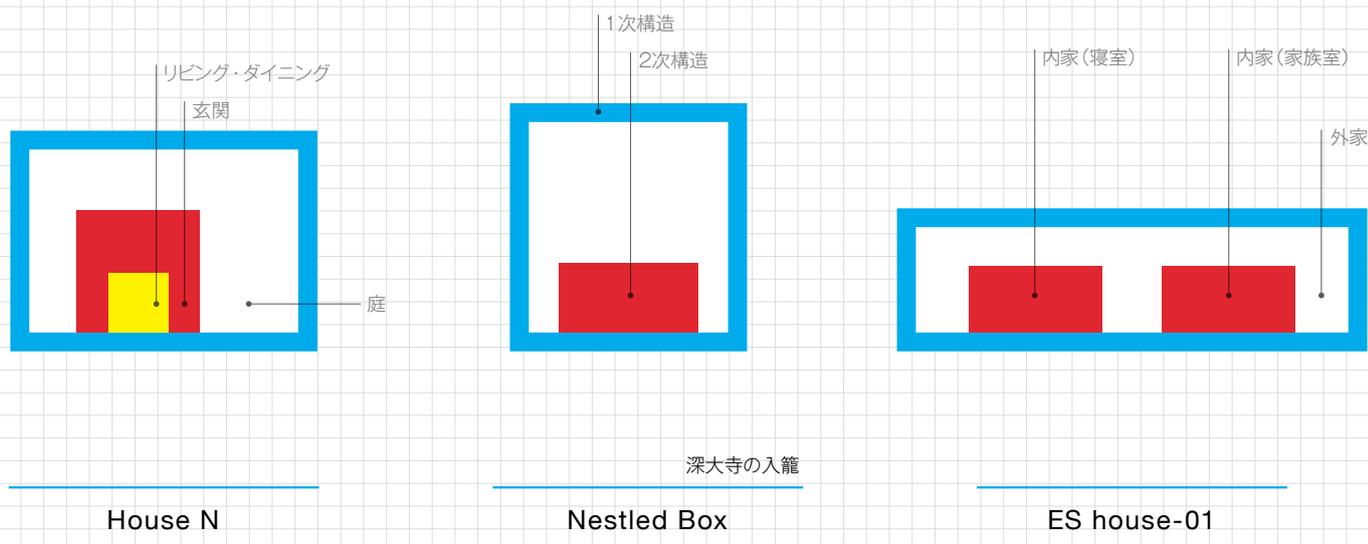
あおき・こうじ／1976年北海道生まれ。2001年北海学園大学工学部建築学科卒業。03年室蘭工業大学大学院修士課程修了。03～11年藤本壮介建築設計事務所。11年青木弘司建築設計事務所設立。おもな作品＝「情緒障害児短期治療施設」(06、藤本壮介建築設計事務所での担当作品)、「調布の家」(14)、「我孫子の家」(16)。



なぜ入れ子にするのか。たとえば、毛綱毅曠設計の「反住器」(1972)は、入れ子の構成を最大限に強調した観念の結晶にも思えるが、入れ子にすることで、北海道の寒さから内側の箱が守られてもいる。あるいは、内側と外側の構造を分けておけば、片方に寿命がきても、外だけ、あるいは中だけを取り替えることもできるのかもしれない。

青木弘司さんが設計した「伊達の家」や、能作淳平さんが設計した「ハウス・イン・ニュータウン」も入れ子だが、なぜそうしたのか。入れ子のメリットについて、おふたりに話を聞いた。 司会・まとも/伏見 唯 写真/山内秀鬼

それぞれの箱



能作
淳平

Nosaku Junpei

のうさく・じゅんぺい/1983年富山県生まれ。2006年武蔵工業大学(現・東京都市大学)工学部建築学科卒業。06~10年長谷川豪建築設計事務所。10年ノウサクジュンペイアーキテクトツ設立。おもな作品=「新宿の小さな家」(11)、「あきるのシルバーハウス」(15)、「高岡のゲストハウス」(16)、能作文徳との共同設計。



内側の大切なものを守る

——今日は、建物を建物で囲う、入れ子の構成のメリットをうかがっていきます。

古い例でいえば、中尊寺金色堂（1124）は、覆堂（おおいどう）（7ページ右）に囲われてきたことよって、そのみことな工芸を今に残しています。

最古の神社建築遺構のひとつである宇治上神社本殿（12世紀）でも、3つの小さな社殿が大きな社殿に覆われてきました。

能作 本尊や堂の周囲をまわる礼拝や修行の仕方がるように、中心にある大事なものを守るように外側を囲っていく入れ子の形式は、宗教建築ではたびたび見出せますね。

——小さな祠も、簡素な小屋でよく覆われています。

能作 保存したい建物に負担をかけないようにすると、より大きな建物で囲うことになるのでしょね。金色堂に加重をかけようとは誰も思いませんから（笑）。

青木 大切なものと、それを守るもの、建物の役割がはっきりしていますよね。

能作 時代によって守る対象は変わりますが、ずっと続けられてきた構成なのではないかと思えます。

内部に外部を取り込む

——現代の住宅だと、守られているのは人間の生活です。

能作 そうですね。70年代の都市住宅では、平面的な入れ子の構成がいくつか提案されていました。一番内側にプライベートな生活空間を配置して、それを囲っている部分でユーティリアをつくるものが多かったと思います。急速な都市化や公害問題によって都市環境が悪化していくなかで、外に対して閉じた箱をつくって、内側に擬似的な外部をつくる構成です。

青木 「住居の中に都市を埋蔵する」ことを意図した、原広司さんの自邸（74）などは顕著な例ですね。

——毛織（もじゅう）さんの「反住器」（72／7ページ左）も、その頃です。玄関から箱の内部に入ると、入れ子状に配置された箱がまた現れて、家の中

に入ったはずなのに、まだ外にいるかのような感覚を味わいます。

能作 そういった都市に対して閉鎖的な入れ子がある一方で、後の藤本壮介さんの「House N」（2008／9ページ左）は開放的で、入れ子の新しい可能性を示したものだと思います。

——緑豊かな庭が、内部に取り込まれていますね。

青木 三重の入れ子にすることで、内外を未分化にしようとしています。いくつもの領域がグラデーションに重なっているような空間のとらえ方は、藤本さんが以前から言われてきたことですが、平面的な提案だけでなく、「House N」で初めて立体的な関係性として構築できた、という話を聞いたことがあります。



Aoki Koji

環境に差異を生み出す

——青木さんは藤本壮介建築設計事務所のOBですが、その入れ子の構成に影響を受けましたか。

青木 多少は（笑）。実際、「伊達の家」（10／17ページ）も同じ入れ子なので。ただ、おそらく主題は違って、「House N」では抽象化された白い箱が等価に入れ子になっていますが、「伊達の家」ではあらゆる材料を現ししながら環境の差を顕在化させようとはしました。

——確かに、内側の箱の中が暖かいのに対して、外側の建屋の中はかなり寒いんですよね。

青木 間欠暖房という言葉があります。必要な場所に、必要な時だけ暖房することです。一般的に外皮の性能が高い寒冷地の住宅では、連続暖房のほうが効率もよく、温度差も小さくなり快適とされていますが、無

理のない範囲で環境のムラを意識的につくることに注目しています。

僕は北海道出身で、居間は暖かくても、玄関は寒い家で育ちました。そういう環境のムラを行き来するような生活には、どこか豊かさがあるような気がしていて、空間のつくり方にも直結するのではないかと思っています。

その環境のムラをつくるために、壁や屋根を解体したんです。防水や断熱などの役割を、意図的に分けました。ですから入れ子の形は最初から目指していたわけではなく、結果的に生まれたものです。

——ひとつの建築の中に環境のムラをつくっている点では、矢田朝士さんの「ES house 01」(2005/8ページ左)も、似ています。「外家」と名づけられたコンクリートの「外郭」の中は、まるで外のような環境になっていて、そこに断熱も施された快適な「内家」が挿入されています。

能作 外部に対する開放や閉鎖ということだけではなく、温熱環境をコントロールする手法として入れ子を用いているわけですね。温熱環境のシミュレーション技術は高くなっていますから、そういう意味では、入れ子の思考の解像度が上がってきているのだと思います。

——北山恒さんの「F3 HOUSE」(1995/8ページ右)でも、断熱や防水性能を満たした箱に、さらに農業用ガラス温室をかぶせることで、ほほ外的ような室内環境が生み出されています。

能作 じつは「ハウス・イン・ニュータウン」(18/25ページ)を設計するときに参考にしていました。建築を重ねていくような発想に共感します。内部と外部で環境をはっきり分けるのではなく、そのあいだの熱環境のグラデーションの部分があるとよいと思います。

コスト・コントロールがしやすい

青木「F3 HOUSE」のエア・ボリュームを、すべてハイスペックな防水や断熱性能の仕様で包んだら、相当コストがかかるでしょうね。

——コスト・コントロールの面でも、入れ子はメリットがありますか。

青木 要は、壁や屋根などの部分ごとに、個別に与えられた役割に応じた、細かくコストを配分することができます。

——「伊達の家」では、どうでしたか。

青木 必要な部屋など、お施主さんの要望を積み上げていくと、100

m²ほどの延床面積になりました。予算的にも、そのくらい大きさが妥当なのですが、300m²ほどの土地なので、単純に外部が余ってしまいう。それで、必要なスペックを備えた住宅の外側に倉庫のような簡素な覆いを設ければ、もう少し広く敷地を囲うことができるのではないかと考えたのです。

——コスト・コントロールから生まれた構成でもあるのですか。

青木 全体の面積は広く確保しながらも、住む人が過ごす時間や場所を主体的に選ぶようなライフスタイルを前提に、コストを調整しています。

構造も融通がきく

——入れ子だと混構造にもしやすいですよ。「反住器」は外が鉄骨造で、

Nosaku Junpei



中が木造。「House N」は外がRC造、中が木造。「伊達の家」も外が鉄骨造、中が木造です。コスト面での選択でしょうか。

青木 部分的に構造形式を変えられることができると、柔軟にコストや性能の微調整ができます。伊達の場合は、外側は大きなスパンを飛ばしたかったので鉄骨造。中は小さなボリュームですから、やはり木造です。

——「ハウス・イン・ニュータウン」は、内外ともに鉄骨造ですが、内側だけ木造ということもありえたのでしょうか。

能作 最初は、内側の箱は木造にしようと考えていました。外側だけ鉄骨で固くつくっておいて、中は木造のほうが自由に変えられると思います。「住む人の好きにしたら」という感じで(笑)。

ただ、内側の箱も鉄骨造にしたら、その梁が外側のフレームのつっかえ棒になって、全体が合理的にできることがわかりました。この場合は、



中尊寺金色堂
旧覆堂

提供/中尊寺

奥州藤原三代を祀り、金箔押しや螺鈿細工などの工芸技術の粋を集めた金色堂(1124)を覆って保護するための堂。金色堂には、建設当初から保護するための工作がなされていたが、現存の旧覆堂は、室町時代中期に建造されたものだと考えられている。簡単な覆いではなく、二軒で、組み物もあるお堂。現在は境内の別の場所に移築され、金色堂は、1965年に建設された鉄筋コンクリート造の別の覆堂によって保護されている。



毛網穀蔵

撮影/藤塚光政

反住器

1972年 北海道釧路市にある住宅。およそ8m立方の外郭の中に、4m立方の部屋があり、さらにその中に1.5m立方の家具が、入れ子状に配置されている。箱と箱のあいだで暮らす住宅をつくることで、人間がいつも何かの隙間で生きているという考えなどを明示しようとした。設計者の観念的な意図が際立っているが、じつは北海道の寒さのなかで、箱の隙間が空気層になって、内側の箱を外側の箱が保護しているという、実用的な面もみられる。

内側も外側の構造にのっかったほうが全体的に安かったんです。

——内部は自由に變化していく想定でしたか。

能作 将来、内部を増築していくとしても、第1期工事の中央のコア部分を壊すことはないと思いましたが、構造やコストの合理性を優先させました。

青木 原理的には、この広い土間に、さらに箱をつくることもできませんよね。入れ子には、冗長性がある。

能作 そうですね。「箱の中の箱」という設定にしておく、住んでいる人もわかりやすいと思います。ちょっと語弊があるかもしれませんが、他者の「生活をことこまかにつくる」というリアリティをあまりもてないんです。住まい方は、住む人にしかわからない。その道具を用意するくらいが、僕にはしつくりきます。だから住まう人にとってもイメージしやすい設定は大事だと思います。設計者はサポート役です。

青木 外側は予算や集団規定の許す限り、できるだけ大きくつくって置いて、中は自由に変えられるというのは、とてもわかりやすくて共感します。住宅は、お施主さんとの共同設計のような感覚もありますから。

外部の街や気候に対応する部分

——外側は、やはり周囲の環境によって決められていくのでしょうか。

能作 「ハウス・イン・ニュータウン」で、外側の箱の内壁を白いペンキで塗っているのは、まわりにハウスメーカーの商品化住宅が並んでいるニュータウンのなかで、周囲にちょっと寄せていきたいと思ったからです。

——ニュータウンの環境に合わせたんですね。

能作 ただ、開口は擁壁の上に直接のせているような形でまわりとはぜんぜん違うので、完全に周囲と調和しているわけでもありません。あくまで擁壁や仕上材などだけ、寄せていった。

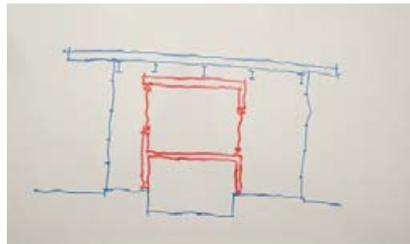
——寄せたいけど、紛れこませたくない。「伊達の家」も、周囲にはないデザインです。

青木 寒冷地の住宅は、寒さ対策で閉ざされがちです。北海道の夜の風景は暗いんですよね。それがちょっと寂しくて、気になっていました。

だから、プライバシーを守りながらも開放的になりたいと思ったんです。通常、窓まわりは納まりも複雑でコストがかかるものですが、外側の建



Aoki Koji



入れ子にすると
内外で役割を分けられます。
そうすると、それぞれの
役割に特化することができます。

屋は断熱層にはなっていないので、スチールのサッシに5mmの単板ガラスを入れたシンプルなカーテンウォールが、予算内で実現しました。

能作 北海道にはない外観の住宅をいかに作りかえるか、という課題があったわけですね。

その点で共感するのは、ニュータウンにある商品化住宅も閉じているものが多いところなんです。室内のスペックをうたうと同時に、セキュリティもうたっている。でも、そんなに治安の悪い場所ではないし、もう少し周囲を信頼して開いてもいいのではないか、という想いはありました。

その開いたところに、ニュータウンのコミュニティのやりとりを促す空間を生み出すというのが、ここでやりたかったことです。

——入れ子の構成のなかで、やはり外側の建物が外部との応答を担っているわけですね。

今号掲載の「雨やどりの家」(34〜41ページ)も、内部に家型の小屋が並べられ、防水や雪下ろしを担う大屋根が、それらをまとめて覆っています。

青木 入れ子だと、壁や屋根が複数用意されていますから、その一つひとつの役割を限定することができます。与えられた役割に特化することもできるのだと思います。

内部の生活に対応する部分

——では内側の箱は、内部の生活に特化した造りになっているのでしょうか。



撮影/藤塚光政

北山 恒

F3 HOUSE

東京郊外に立つ住宅。男性ひとり住む最小限の生活のための空間を細長い箱に集約し、その箱を農業用ガラス温室で覆うことで、大人数でパーティーなどでもできる空間を付け加えている。ガラス温室のところは「外室」と名づけられ、庭のような外部空間として扱われ、外室の開口をあけたままでも生活できるように、「内室」と名づけられた細長い箱のほうに防水や断熱処理を施している。既製品の温室を用いることで、全体のコストも削減。



撮影/相巻豊

矢田 朝士

ES house-01

奈良県の農村集落に立つ住宅。「外家」と名づけられた鉄筋コンクリート造の大きな箱の中に、木造と鉄骨造による2つの「内家」が入れ子状に挿入されている。隣接する工場や周辺開発の影響が予想されるなかで、「一度」「外家」で覆ってしまい、光や風などの自然を取り込むことにより、内部に擬似的な自然環境を生み出している。そこに防水や断熱処理の施された「内家」を建て、居住空間を生み出している。「内家」だけ建て替えることもできる。

青木 はい。入れ子にすると外部の条件に対して反応する部分と、住み手の生活に反応する部分を分けることができます。それらを統合して考えると、周辺環境や集団規定から決められた形の中で、どのような暮らしを実現させていくのか、ということを考えなくてはならない。それでは、無理が生じることもあると思うんです。

能作 その統合が設計の醍醐味で、なんとか納めるのが普通ですけれども、正直しんどくないか、という気持ちにもなります……。ちよつとした住まい手の要望に対して、あらためて全体を変えなくてはいけないことも出てきたりするので。

法律や構造的な合理性、予算の調整などは、もちろん僕らの仕事です。ただ、日々の生活にかかわるところはお施主さんと共有していきたいです。そのとき、構造や集団規定に従うものと、生活に対応するものとを分けて設定しておく、お互いに楽になるのではないかと思います。——内海智行さんが設計した「深大寺の入籠」(2006/9ページ右)が、同じようなコンセプトでつくられています。外側のシェルはつくっても、同じようなコンセプトでつくられています。外側のシェルはつくっても、同じような状況に合わせて、内部だけがつくり替えられているそうです。時々状況に合わせて、内部だけがつくり替えられているそうです。

能作 家族のあり方が数年、数十年で変わっていったときに、住みつづけるか、建物を再建するか、という1か0かの選択肢だけでなく、内部だけ再建するという選択肢が用意されているのはいいですね。汎用性を感じます。

青木 内部と外部を別々に扱うことができるのも、建物が複数用意されているからです。役割を分けることによって見出された可能性であり、獲得された表現なのだと思います。

内外の役割を分けることができる

——さまざまな役割をひとつに集約させるオール・イン・ワンのつくりにかたではなく、家をふたつに分け、壁や屋根もふたつに分けることによって、役割を分散させることができるというのが、入れ子のメリットなのかもしれません。

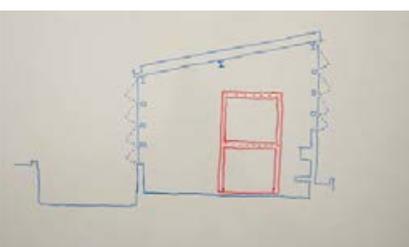
同じく今号掲載の「オフセット町家」(26〜33ページ)も、保存してきたい町家の中に、現代的な暮らしができるような温熱環境と設備をもった小町家が挿入されています。

青木 古い建物を保存しつつ、性能を担保するために、新しいボックスを入れる。保存されるものと、性能を満たすもの。やはり役割をふたつに分けたことが、メリットになっています。入れ子という形式が観念のモデルではなく、非常に現実的なあり方にもなりうるものがよくわかります。

能作 リスペクトしているものがあるから、そこに負担をかけないように、分けてつくっているんですね。主人と付き人みたいに(笑)。ただ、その付き人がいなければ、主人も存在しえない、という関係性です。

僕は、今日のやりとりで「役割」という言葉を使うと、確かに入れ子をとらえやすくなると思いました。中尊寺を例にとっても、金色堂には藤原三代を祀るフィロソフィカルな役割があり、覆堂には、内側を風雨から守るといってプラグマティックな役割があると言えます。

——金色堂を守る役割であった覆堂も、今ではその役目を終えて、自身も大切なお堂のひとつになっていますね。金色堂を守りつづけてきた美しさがあるように思います。



入れ子は、必ずしも特殊な形式ではなく、さまざまな状況に対応できる汎用性があるのかもしれませんが。



Nosaku Junpei

青木 覆堂が美しいのは、役割が見てわかるからなのかもしれませんが。壁や屋根などの役割が見てわかれば、建築の成り立ちを理解することができる。それが愛着を育み、たいせつに維持されていくことにつながるのではないかと思います。

能作 入れ子というのは特殊なものだと思いましたが、じつは汎用性があるのかもしれませんが。今日話に出た建築も、さまざまな理由で入れ子になっていくことがわかりました。抽象的な形式としてとらえると限界があるように思うのですが、一つひとつの個別の役割を見ていくと、可能性が開ける気がしました。



提供/ミロクラムスタジオ

内海智行

深大寺の入籠

東京都調布市に立つ住宅。高さ8mほどの立方体の外殻をつくり、その中に外殻とは別構造の箱を挿入している。将来の使われ方が変わることを想定し、内部の別構造だけを建て替えられるようにしたものの。施工も個別に行われ、まずは1次構造として、集材材による強度の高いラーメン構造で外殻のみをつくり、その中に2次構造として、建て替えやすい在来木造の箱をつくっている。竣工後も、2次構造は住人が変更しつづけている。



藤本壮介

撮影/WANSHAN

House N

大分県にある住宅。穴のあいた3つの箱が入れ子状に配置されている。一見、穴だらけなのでプライバシーがないように思えるが、それぞれ穴がずれていることにより、外からの視線が中まであまり届かない。扉などによって内部を完全に閉じたり、あるいはガラス張りなどによって完全に開放するのではなく、少しずつグラデーションのように開いていく構成。箱の内部につくられた緑豊かな庭も、まるで室内のように近しく感じられる。



特集／入れ子の家——壁を並べ、屋根を重ねる

ケーススタディ1

壁の中に生まれた空間

作品

伊達の家

設計

青木弘司

鉄骨造の建物の内側に、木造の建物が入れ子状に立っている。寝室やLDKなどの居住域は、内側の建物の中にある。

Special Feature

Double Housing

Case Study

1



“House in Date”



壁や屋根の役割は多様だ。

目隠しであり、防水層であり、断熱層でもある。

それらの役割を、ひとつの壁や屋根にゆだねるのではなく、複数に分散させていく。

その結果、壁も屋根もふたつある、入れ子状の構成が生まれた。

北海道・千歳駅から函館行の特急にのつて1時間あまり。北西に雄大な有珠山を望み、南は内浦湾に面した伊達市は、北海道のなかでは温暖な気候で知られ「北の湘南」と呼ばれる風光明媚な土地である。年間平均気温は9・5℃。日照時間が長く、降雪量も少ないので、実際、札幌などからのリゾートエリア組の移住先として人気があるという。伊達紋別駅から車で数分。比較的新しい住宅地の通りに面して立つその姿は、家というよりは「巨大な格納庫」といった風情なのだが、格納されているのは消防車でも飛行機でもない、まぎれもなく「住宅」である。しかも内側の建物の外壁は、なにやらふかふかしたやわらかい素材で包まれている、まるで建設途中の家をそのままショーウィンドウに飾っているかのような、鮮烈なインパクトを周囲に与えている。

建物の「ふところ」を第3の空間に

取材に訪れたのは12月上旬。小雪混じりの風が冷たく、内部に入るとひと息つけるのだが、高さ2層分のがらんとした土間スペースは足元からしんと寒い。ここで靴を脱いで内側の建物に入ると、ようやく暖かい室内となる。防水加工されていない室内用の木製扉で、気温差のある建物に出入りするというのは、なんとも不思議な感覚で

Special Feature
Double Housing
Case Study

1



"House in Date"

あった。つまりここでは雨風をよける覆いの機能と、暑さ寒さをしのぐ断熱の機能が、外側と内側の建物で明確に分離されていて、そのあいだに、内部でもなく外部でもない「空気層(土間)」と呼ばれる第3の空間が広がっている。通常ならば断熱材と外壁材のあいだに隠されてしまう「ふところ」のデッドスペースを、いわば極端に引き延ばして、利用可能な空間にしたわけである。

設計者の青木弘司さんと建主が出会ったのは2002年のこと。伊達市内の社会福祉法人に勤務する建主は、当時、新しい福祉施設の設計を藤本壮介建築設計事務所に依頼した病院側の現場担当者であった。青木さんは、まだ室蘭工業大学の大学院生。翌春から藤本事務所に就職することが内定しており、ひと足先に現場スタッフとして仕事を任されていたのだ。

一方の建主も、病院職員としてまだ駆け出しの時期で、若いふたりは藤本壮介氏の斬新なプランを実現化するのに苦業をともしたことであろう。そのかいもあって、「情緒障害児短期治療施設」(2006、16ページ)は07年度のJIA建築大賞を受賞。青木さんは11年に独立するが、建主との交流はその後も続いていた。そういう経緯もあって、家を新築するな

ら同世代の青木さんにと、ごく自然な流れでお願いしたと建主は言う。「夫婦ふたりの住まいで、有珠山がよく見えるリビングとテラス、そして趣

味の自転車が置ける広い土間がほしい、というのが青木さんへのリクエストでした」

最初から倉庫が立っているよう

敷地は100坪弱。夫婦ふたりの家としては充分すぎる広さだが、周辺の地価相場は坪11万円程度なので、土地代は1000万円弱ほどである。青木さんの最初のプランは、ここに大きな鉄製屋根をかけて下に小さな木造の家を建て、庇を大きく張り出し、その軒下を土間のような自由な空間として使うというもの。そこから建主と話し合いを重ねるうちに、やがて道路側をカーテンウォールで覆い、庭側は吹きさらしという案になり、さらには四面とも覆って完全な入れ子状にするという案へと変化して

いった。当然、予算オーバーとなるのだが、外側の建物の断熱性能をいっさい取り払った設計にすることで、坪単価を66万〜67万円、総工費を2900万円(税込)に抑えることができた。周囲の坪単価相場より数万円安い計算となる。

「外側の建物は、汎用的な折板屋根に石膏ボードを使って、ごく普通に鉄骨造の倉庫を設計すればこうなる、というものを目指しました。独立してしばらくはリフォームの設計が続いたのですが、これが意外に楽しかったこともあって、今回は新築ですが、与条件としてそこに建っているような、アノニマスなデザインにしたかった」と青木さんは言う。

床面積100㎡、高さ6・4mの鉄骨造の中に、建築面積46㎡、高さ5・7mの木造2階建てが挿入されており、延床面積にすると、内側が92㎡で外側が53㎡。内外比は63対37となる。換言すれば、「ふところ」が4割近くを占める異様な建築である。確認申請を出したときは、さすがに担当者がめんくらったというが、特別な法規をクリアする必要があるわけでもなく、施工もスムーズに進められたという。

建主とのキヤッチボールから思わぬコンセプトが立ち上がる

「そもそも住宅の壁芯面積と内法面積の差



断熱材と外壁材の
あいだの「ふところ」を
引き延ばし、
利用可能な空間に。

写真右ページ/玄関。右
手の土間は、自転車など
が置ける物置きスペース。
下/屋外から玄関を
見る。建物の中に建物が
あり、扉も二重になって
いる。左/南側の土間。
土間は、左手の壁の内側
にある居住域を守る空気
層にもなっている。





LDKの北側の窓。内外の窓のあいだに空気層（北土間）がある。



内側の建物の内部。2階のLDK。

っていったいなんだらう、と疑問に思うことはありませんか？ 誰のための空間で、なんのために家賃や税金を払っているのかと。今回は建主とキャッチボールを重ねていくうちに大屋根案は消え、大小の建物を入れ子状にする案が変わってきました。ならばその隙間に広がる不透明な空間を『見える化』して、使えるスペースに転換すれば、いったいどういう空間になるのだろうか、というふうなコンセプトも切り替えていったのです。最初から最後までひとりですべて決めて設計していたら、こんなふうにおもしろくは発展しなかったでしょうね」と青木さん。

引きはがされて建材が露わになった感じを出すために、青木さんがこだわったのが内側建物の外壁。MGボードと呼ばれる吸音材を張り、ボタン留めしただけの仕上げとなっている。押せばへこむ、スポンジのようなふかふかの家。さらに設計にあたっては、友人で住宅の温熱環境に詳しい、レビ設計室の中川純氏の協力も得ている。外側建物の排気口を付ける位置をシミュレーションしてもらい、冬季は内側建物の1階を床暖房にして全体を暖めるのが効果的、といったアドバイスを受けている。取材日の土間の気温は4℃。建主に測温を協力してもらい、中川氏に定期的にモニタリング数値を伝えて、より

Special Feature
Double
Housing
Case Study

1



"House in Date"

快適な室温環境に改善するための資料に生かしている。

内側建物の2階は、広々としたキッチン兼リビングダイニング。この家のメイン・ルームであり、窓からは要望どおり有珠山が見渡せる。天井高さ・6mの壁面には約5000冊のコミックがびっしりと詰まっておき、そこに学習塾の払い下げで買ったという学校机と、アルネ・ヤコブセンのエッグチェアが、なぜかしっくりマッチしている。新しいのにどこかつかしい、モノが多いのに雑然としていない、なんとも心安らぐ場所となっている。

「青木さんと何度も図面をやりとりして、20分の1の巨大な模型までつくってくださったおかげで、変な話ですけど、完成した家に初めて入ったときに、ものすごく冷静でした。あ、この家、見たことある。みたいな既視感(笑)。おかげで違和感も不便もなく、毎日楽しく暮らしています」と、こともなげに建主は語るが、青木さんに言わせれば「図面を読み込むリテラシーが一般の方とは全然違う」のだと言う。

特別な建主に恵まれたという幸運な面もあるが、ここでは図面と模型による「見える化」の徹底によって、建主と建築家のあいだで陥りがちな「空間認識のギャップ」も、事前に解消されているように思われる。

「見える化」を徹底することで配線や配管までが美しく

もうひとつ、思わぬ効果を発揮したことがあった。「見える化」が電気や設備の施工業者たちの職人魂に火をつけたのだ。普段は壁面内に隠されている配線や管が露出する設計ということで、現場は大いに奮起してくれたという。ラック上をはう電気配線はびしりと無駄のないラインを描き、給湯の銅管はみごとに溶接され、抽象的なコンポジションをなすかのように納まっている。普段は隠されているものが、こんなにも魅力的になりうるとは意外な発見であった。

すべてが順調で、予定どりの家ができたと満足する建主だが、ひとつだけ想定外のうれしいことが起こった。奥さんが妊娠して、家の完成とほぼ同時期の昨年5月に、男の子を出産したのだ。いたるところに男の子を隠れ場所がある、このふかふかの家で、男の子はどのように遊ぶのだろうか。今のところ、1階の客間に窓をうがって子ども部屋にする予定だというが、まだまだ内側建物を増築できるスペースの余裕がある。今後どのような姿に発展していくのか、想像するだけで楽しくなってくる家である。



写真右上／外側と内側の建物のあいだの空間。露わになった鉄骨は物を置く棚にもなる。
 左上／通常は壁の中に隠される電気配線が、天井や壁をはって露わになっている。

通常は隠されている配線、配管、断熱材、不燃材などの部材が、露出した「見える化」。

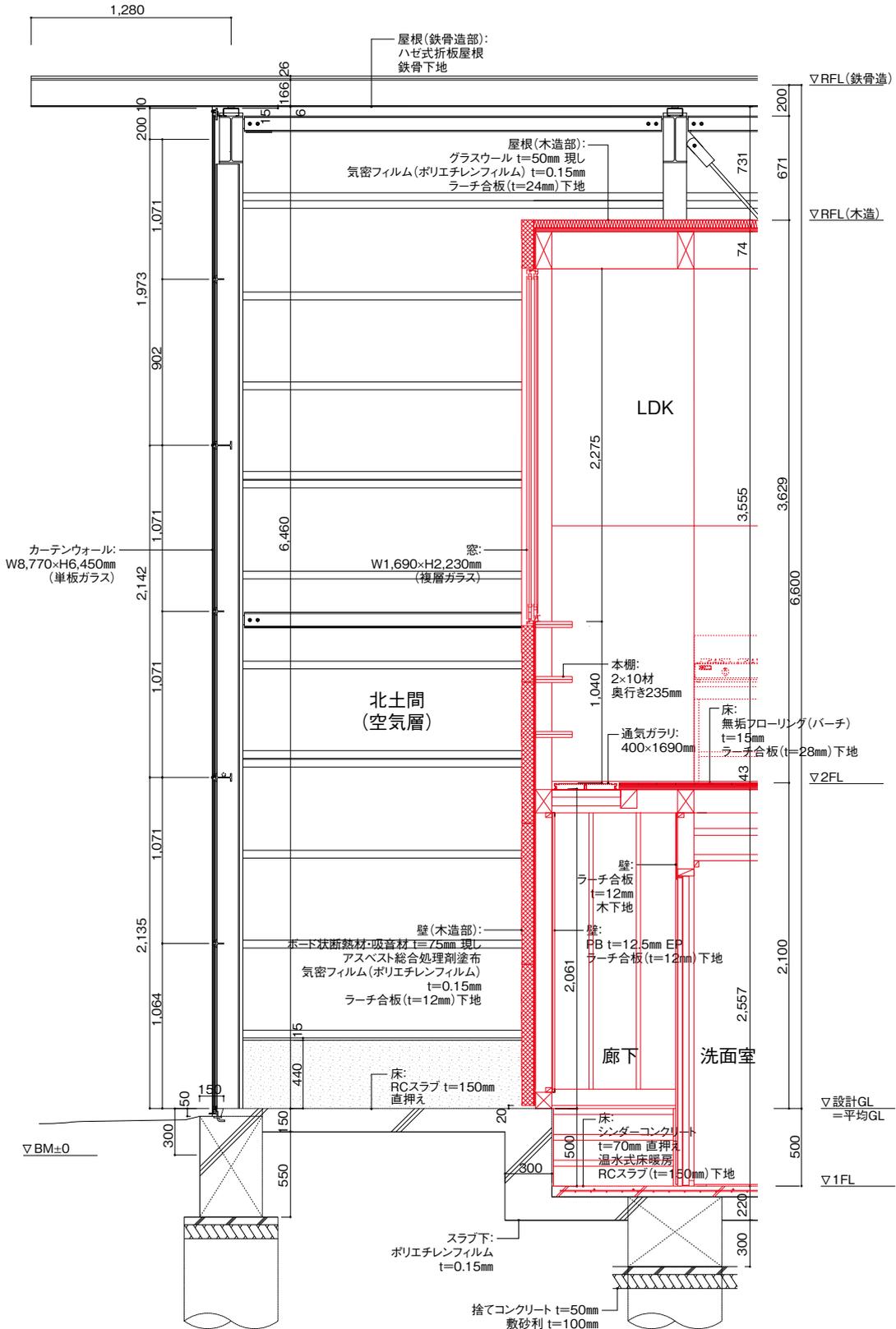


写真右下／内側の建物の外壁。断熱性能のあるボードが、そのまま仕上げ材になっている。
 左下／外側の建物の内壁。ベントキャップ、配管、不燃材なども露出している。

矩計図

0 400 800mm

1/40



藤本壮介
建築設計事務所での
青木さんの担当作品

情緒障害児短期治療施設



写真2点、撮影/阿野太一

情緒障害のある子どもたちが治療のために生活する施設。北海道伊達市にあり、「伊達の家」の建主はこの治療施設などを運営する社会福祉法人に勤務している。





南側外観。外階段を上ると、屋上テラスに至る。

「伊達の家」

建築概要

所在地	北海道伊達市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計	青木弘司/ 青木弘司建築設計事務所
構造設計	RGB STRUCTURE
環境デザイン	中川純、丸山由香、常岡優吾、 古川亮哉、山口真吾 ／早稲田大学大学院
構造	木造、鉄骨造
施工	平口建設
階数	地上2階
敷地面積	292.00㎡
建築面積	119.54㎡
延床面積	145.81㎡
設計期間	2015年8月～2016年11月
工事期間	2016年12月～2017年5月

おもな外部仕上げ(外側の建物)

屋根	はげ式折板屋根
外壁	ガルバリウム鋼板角波
開口部	スチール製カーテンウォール (単板ガラス)

おもな外部仕上げ(内側の建物)

屋根	グラスウール t=50mm 現し
壁	ボード状断熱材・吸音材 t=75mm 現し
開口部	アルミサッシ(複層ガラス)

おもな内部仕上げ

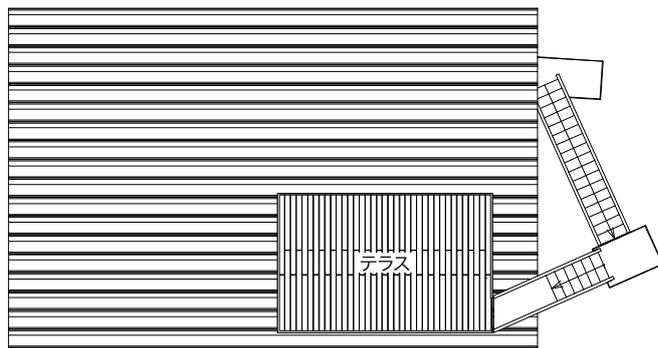
リビング・ダイニング・キッチン

床	フローリング t=15mm、 フレキシブルボード t=8mm
壁・天井	木造躯体現し
浴室	
床	コンクリート t=70mm 金ごて仕上げ FRP防水 t=3mm トップコート
壁	フレキシブルボード t=8mm FRP防水 t=3mm トップコート
天井	フレキシブルボード t=8mm
寝室	
床	コンクリート t=70mm 金ごて仕上げ
壁・天井	木造躯体現し

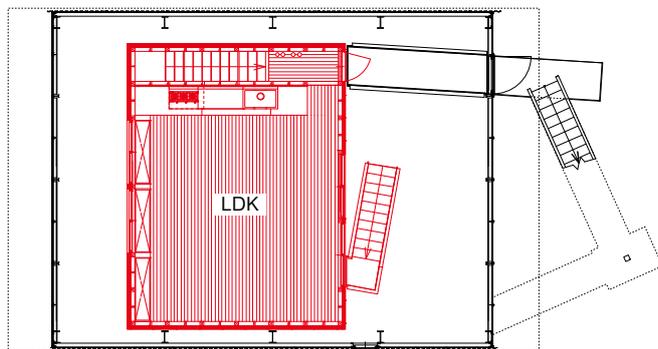
平面図

0 2 4m N
1/200

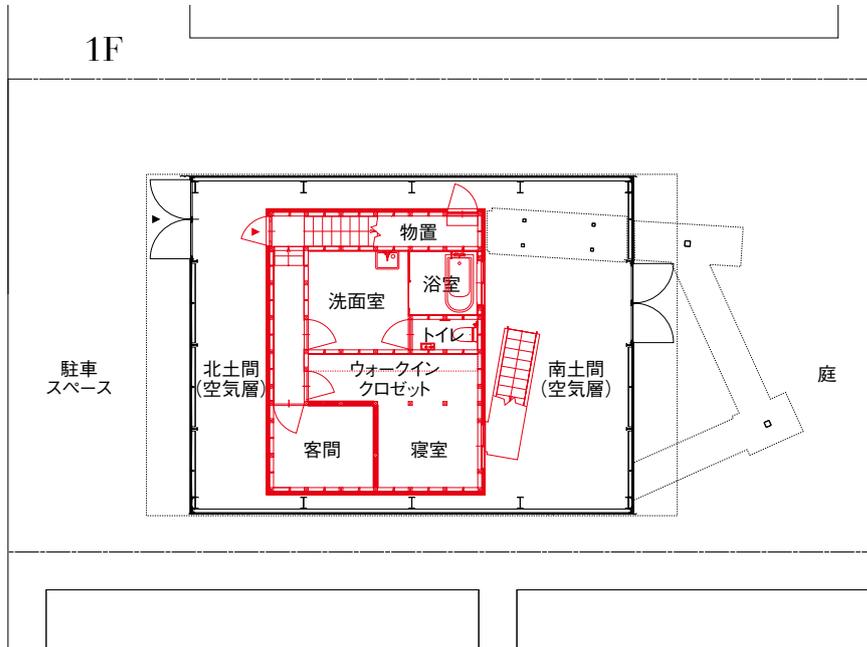
RF



2F



1F



浴室から、南土間越しに庭を見る。内側の建物は断熱が施され、開口部も複層ガラスになっている。



白く塗られた鉄骨の覆いの中に、ラージ合板の木箱が立っている。ダイニングや寝室は木箱の中にある。



特集／入れ子の家——壁を並べ、屋根を重ねる

ケーススタディ2

地域コミュニティを、屋内に誘う

作品 ハウス・イン・ニュータウン

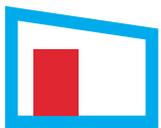
設計

能作淳平

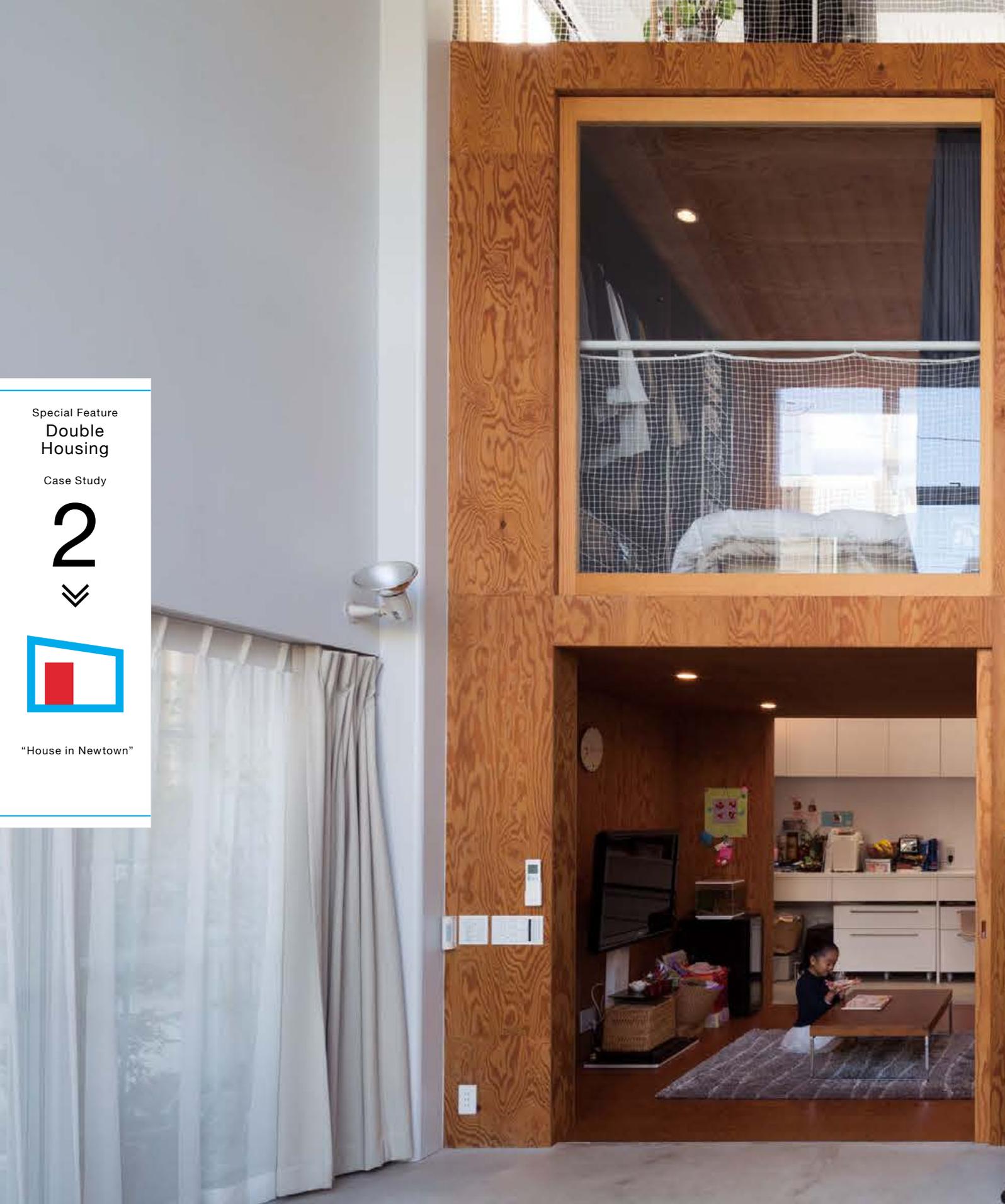
Special Feature
Double
Housing

Case Study

2



"House in Newtown"



ニュータウンのコミュニティの
受け皿になるような場所を、
家の中につくりたい。
そうした想いを反映するため、
プライベートの閉じた空間を、地域に開かれた
大きな空間が覆っている。

ニュータウンに住むことを望んだ建主

「ハウス・イン・ニュータウン」は、神奈川県藤沢市郊外の新興住宅地に立つ核家族住宅である。建主のFさんは横浜市内の大手企業に勤めるサラリーマンで、夫人とふたりの子どもの4人暮らし。3年前、38歳でこの家を建てた。能作淳平さんとの出会いは、直接本人ではなく、Fさんと能作さんの母が共通の趣味をもつ知人だったことがきっかけだった。

敷地探しから相談にのった能作さんは、多様な人が住んでいる街がよいだろうと考え、変形敷地であってもそういう街の残余に入り込むことを勧めたが、Fさん夫妻には「そういう敷地ではないんです」ときっぱり否定された。彼らは区画整理された新しい敷地を望んでいた。新しい街、ニュータウンに家を構えることを希望した。

能作さんはこの住宅を発表（『新建築住宅特集』2014年12月号）した際に、「子育てのための地域コミュニティを期待してここに新居を構えた」と記している。これはもちろん能作

さんではなくFさん夫妻の期待である。おふたりは、開放的で明るい家がいいという希望をもっていたが、それはニュータウンで地域コミュニティを発動させる装置としての家という希望だった。しかしなぜニュータウンという場所にこだわったのか。

そこには夫人の強い希望があった。Fさん夫妻とともに広島出身だが、夫人の実家は広島市郊外の戸建て住宅団地、いわゆるニュータウンで、同世代の小さな子どもがいる家庭がほぼ同時に家を建てて住みはじめた。彼女はその子たちと一緒に小学校に通学し、帰ったら一緒に公園で遊んで、という充実した幼少期を過ごした。その楽しかった経験を自らの子育てでも実践したいと考えたわけである。

入れ子という選択

能作さんにゆだねられたのは、そうしたニュータウンでの理想的な子育て環境の空間化だった。そこで、大きくて開かれたスペースをどこかに設けようと提案し、設計を始めた。それを3種類の形式でスタディしている。1階をピロティにして開放し、2階をプライ

ベートゾーンとする案、開放的な大空間とプライベートな個室群を並置する案、そして大空間の中に個室群を入れ子にした案である。前2者はプライベートゾーンとパブリックゾーンの関係が明瞭で図式性が強く、スケールを超えて公共建築などでもよく用いられる構成である。それに対して入れ子案はプライベートゾーンとパブリックゾーンの境界が一面でなく複数面になるため、両者の多様な関係を形成しやすい、変化に對しても有効な図式である。つまり前2者は不変性を前提とした恒久図式、入れ子案は時間性をはらんだ可変図式だといえる。

敷地はニュータウンの一面。コミュニティを誘うように、正面は全面ガラス張りになっている。

りえないかと考え、そこからこの構成を編み出した。なので「ハウス・イン・ニュータウン」は、断面図を見ると入れ子構造に見えるが、平面的には空間が層状になっているようにしか見えない。それは、入れ子という図式を可変性の図式としてとらえているからで、この住宅も、大きな空間と架構だけがあり、そこに生活に必要な要素が取り付いて住宅となっていくという物語の延長上に位置づけられている。

生活インフラとしてのスケルトン

構造は短手5750mm、長手8900mmの平面を200mm角の鋼管柱6本で支え、そこにH型鋼の梁を架け渡す単純な架構で、入れ子の木造に見える部分は造作である。構造設計は大野博史さんと、柱の脚部にはベースプレートを用いずH型鋼の土台をまわして緊結している。柱の転倒に対する抵抗力が増し、柱を細くできた。もちろん構造体が熱橋とならないように、外断熱を採用している。北側接道で、東側に駐車場を配し、そこに向かって間口いっぱい4450mm幅に引き違い戸を設けている。そこから入るとホ

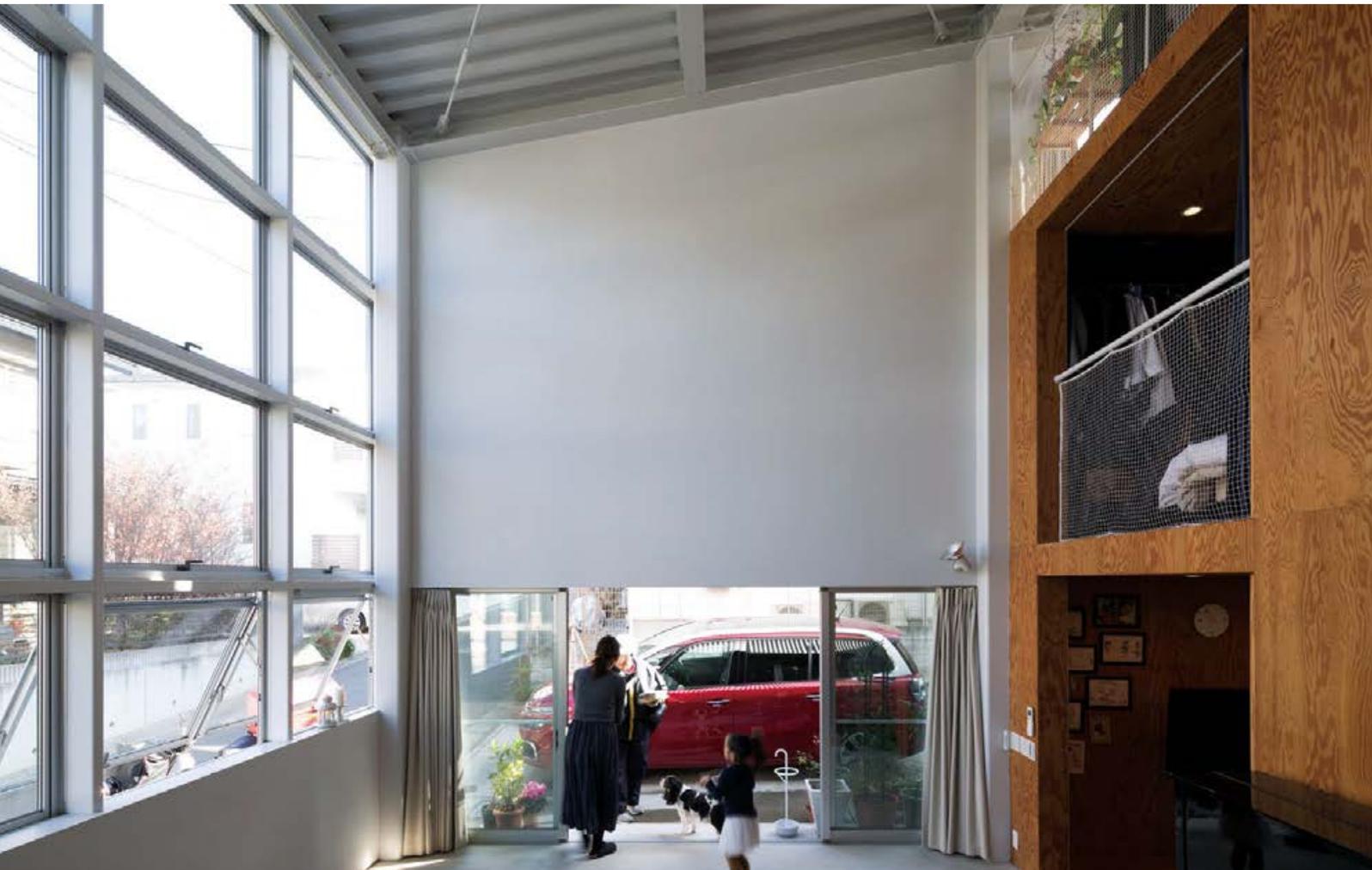
Special Feature
Double Housing
Case Study

2



"House in Newtown"

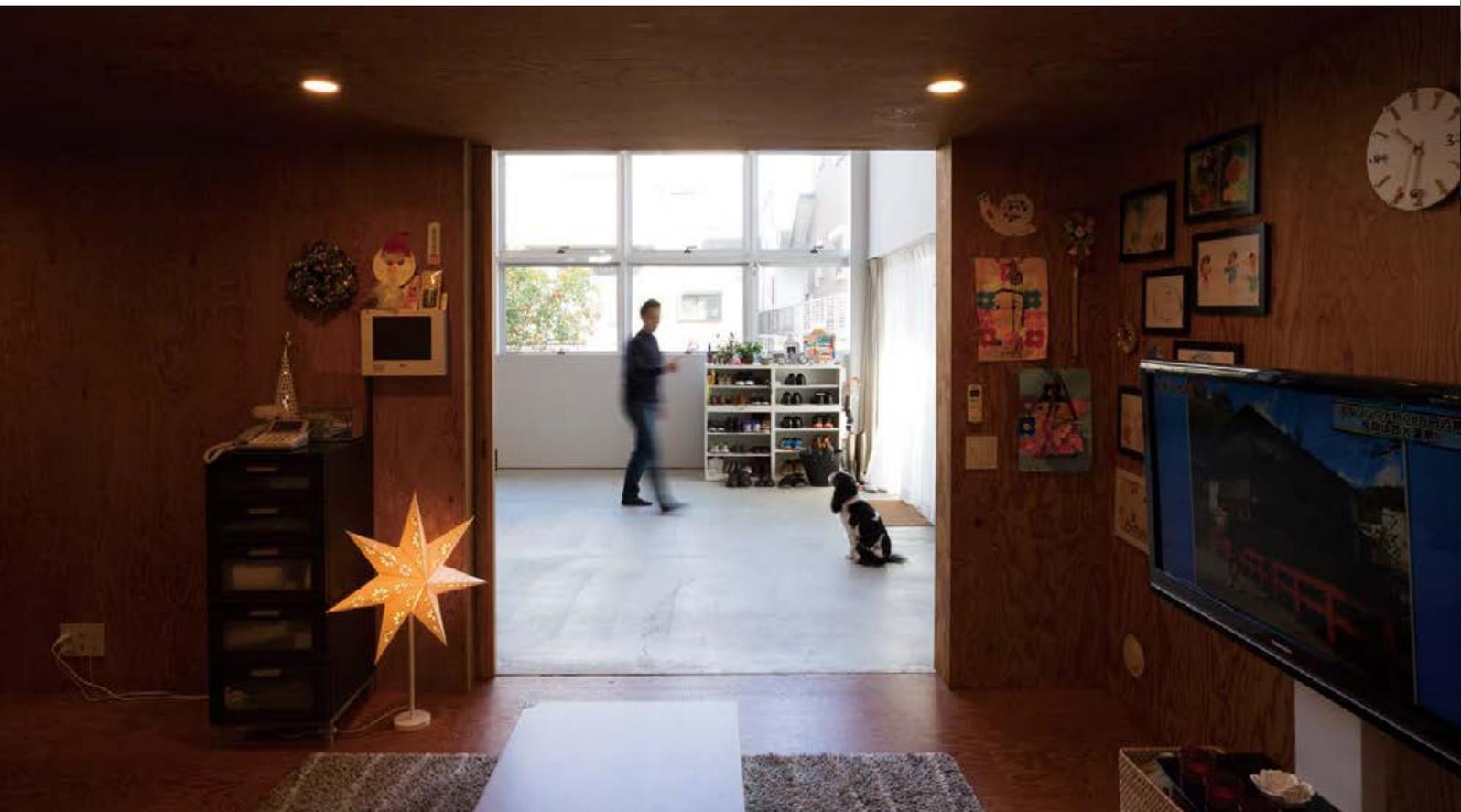




写真下/木箱内部のダイニングから、ホールを見る。木箱内部はプライバシーが確保されている。

パブリックスペースとなる
大きな覆いの中に、プライベートスペースの
木箱を挿入。

写真上/ホール。プライベートゾーンの木箱内部に対して、パブリックスペースになっている。



ールである。ホールの南側に2層分の木製
ポリウムが位置し、1階にダイニング、
2階にベッドルームが入る。ダイニングの
南側にキッチンと水まわりが位置する。一
見するとプライベートゾーンにはダイニン
グとベッドルームの2部屋しかないように
見えるが、ベッドルームの上、つまり木製
ポリウムの屋上部分（サンルーム）を予
備室とし、そこに必要に応じて子ども部屋
を増設する予定だという。じつは3階建て
なのだった。

子ども部屋をあらかじめ固定的に設定せ
ず、必要に応じてつくり、子どもが独立し
て出ていったら解体して別の用途にあてる。
界壁は主体構造ではないので極論すれば内
部の木製造作をすべて撤去して別のかたち
に組み替えることもできる。これは入れ子
構造を超えて、現代版メタボリズム住宅で
ある。この住宅における入れ子構造とは、
内側に強い核を存在させるのではなく、
入れ子の部分は自由に増
改築して生活に適応させ
ることができる構造であ

ることが確認された。

都市と住宅の 入れ子関係

床をモルタルで仕上げたホールは、駐車
場、道路から連続した空間で、仕上げやレ
ベルの差を感じさせない、いつてみれば敷
居の低い空間である。木製造作の側、つま
りダイニングから見るとこのホールは、ち
よっと家の外、みたいな感じである。子ど
もの友だちが遊びに来てテントを張って泊
まっていたり、テーブルを出して駐車場
と一体でパーベキューをやったり、クリス
マスのパーティをやったりと、すでに地域
コミュニティの核となっている様相である。
夫人の「公民館のような」という表現が腑
に落ちた。

この様相は次のように整理することがで
きるだろう。入れ子構造の住宅に内在する
ウチソトと、ニュータウ
ンのなかの1軒の住宅は、
どちらも入れ子構造であ

る。つまり位相関係にある。地域コミュニ
ティは、その入れ子の境界面に生まれる。
かつてのニュータウンでは、公園だけでな
くそれぞれの家の庭やそこかしこにあった
原っぱなどが境界面としてコミュニティス
ペースとなり住宅地と人々の暮らしをつな
いでいた。逆に境界面を活性化させること
ができれば、ニュータウンは今でも夢のニ
ュータウンでいられるのではないか。この
住宅はその可能性を開示しているという点
でとても現代的かつ示唆的である。

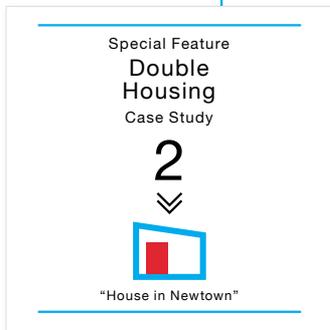
オールド・ ニュータウンでの展開

能作さんは、この後、分譲から約30年経
ったオールド・ニュータウンに建つ住宅の
リノベーションを手がけた（あきるのシル
バーハウス、2015）。定年退職した建主
の要望は「近所の人たちとお茶が飲める場
所がほしい」というものだった。能作さん
は、その住宅の庭に2層分の鉄骨のフレー
ムを組んでポリカーボネートで屋根をかけ、

外周部にカーテンを吊るした半外部空間を
つくった。「ハウス・イン・ニュータウン」
のホール概念をもち込んで、住宅の庭を土
間空間化したのである。そこは現在、地域
の人たちの集会場となっている。

30年も住んでいれば、お互いに顔は知っ
ているし、挨拶もする。しかし、そこから
もう一歩踏み込んだご近所付き合いのため
の場がニュータウンにはなかった。だから
靴を脱がなくても訪ねられる敷居の低い土
間空間が地域のコミュニティの触媒となっ
た。客は玄関からではなく、土間を通って
やってくる。そしてなんとかつての玄関は
勝手口になった。戦前の家の象徴であった
玄関と応接間が、ニュータウンの建設から
数十年を経たりノベーションによってよう
やく解体された。

私たちが日々取り組むべきことは、近代
の核家族住宅の更新である。空間構成の探
求はそのためのひとつの手段である。「ハウ
ス・イン・ニュータウン」における入れ子
とその展開は、そのひとつの有益な実験結
果なのである。



そのほかの能作さんの作品



新宿の小さな家

2011年

敷地面積50㎡ほどの小住宅。吹抜けに鉄骨梁を架け渡し、生活の変化に合わせて増床できている。



あきるのシルバーハウス

2015年

約30年前に開発された郊外のニュータウンに立つ住宅の増改築。通り側に鉄骨フレームで、人が集まることができる大きなスペースが増築されている。

写真3点、提供／ノウサクジュンベアーキテツ



写真上／3階サンルーム。法規上は3階だが、木箱の上にあるため、まるで屋上のようなスペースになっている。右下／キッチン。木箱と壁のあいだのスペース。高窓からドラフト効果で空気が外に抜ける。

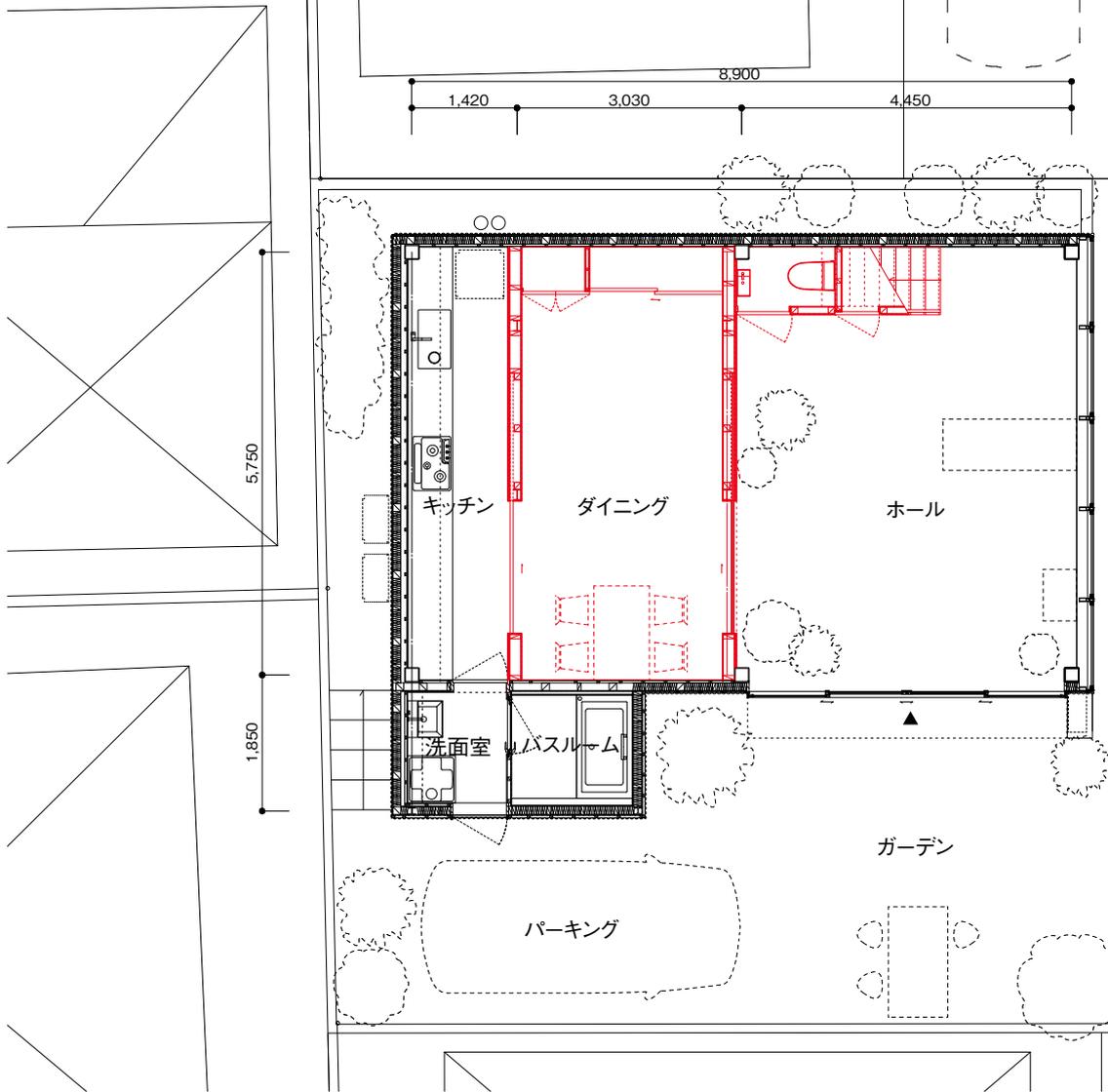
大きな覆いと、小さな木箱。そのあいだのスペースを、コミュニティのための空間に生かす。



写真左中／木箱内部の1階ダイニング。床・壁・天井の内部仕上げは、いずれもラージ合板。左下／2階ベッドルーム。窓を開けると風が抜ける。



平面図



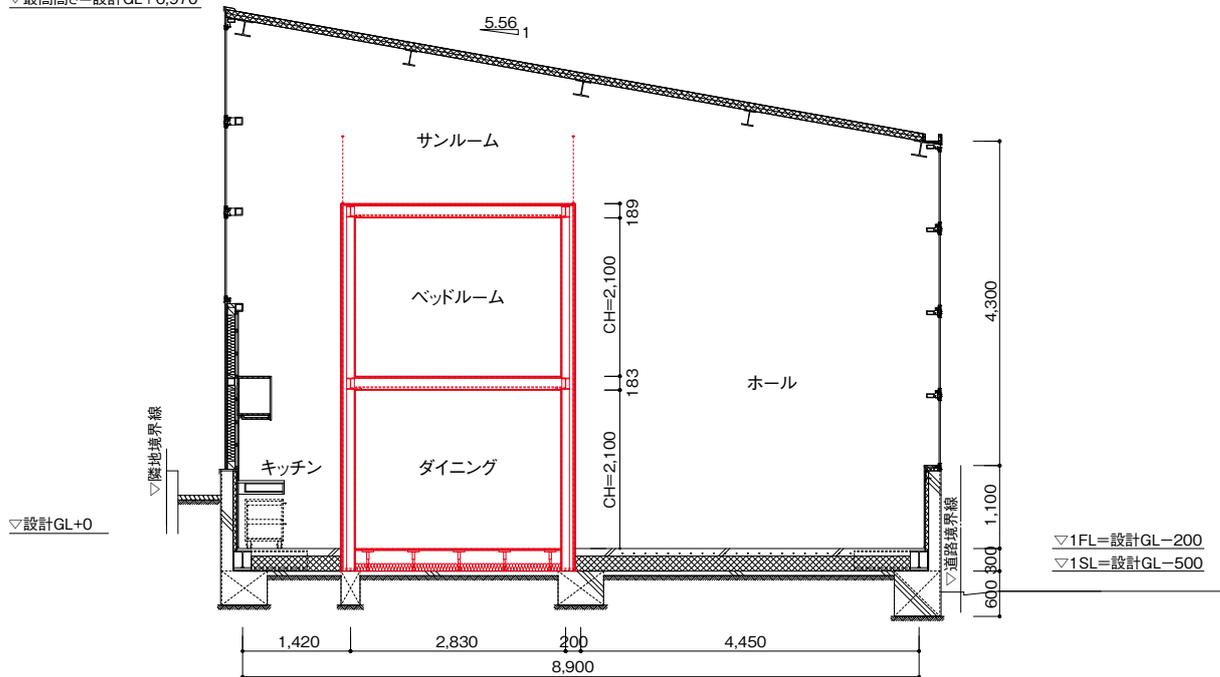
1F

断面図



1/100

▽最高高さは設計GL+6.970





写真上/すべり出し窓。
下/正面。ひな壇状に造
成された周囲と合わせ、
腰壁を立ち上げている。



「ハウス・イン・ニュータウン」

建築概要

所在地	神奈川県藤沢市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	能作淳平/ ノウサクジュンバイアーキテクト
構造設計	オーノJAPAN
構造	鉄骨造
施工	工藤工務店
階数	地上3階
敷地面積	124.17㎡
建築面積	61.88㎡
延床面積	98.23㎡
設計期間	2011年7月～2013年5月
工事期間	2013年6月～2014年6月

おもな外部仕上げ(外側の建物)

屋根	シート防水
外壁	ガルバリウム鋼板波板
開口部	アルミサッシ

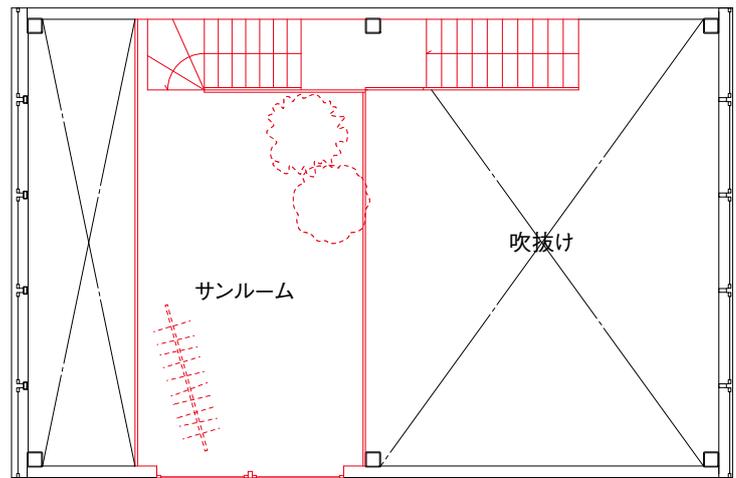
おもな外部仕上げ(内側の建物)

屋根・壁	ラーチ合板 t=12mm OS
------	-----------------

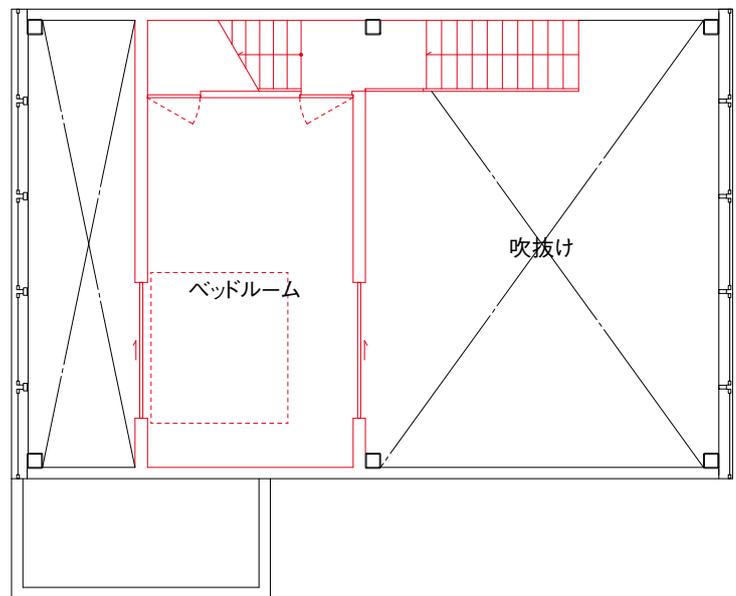
おもな内部仕上げ

ホール・キッチン	
床	コンクリート t=70mm 金ごて仕上げ WAX
壁	PB t=12.5mm AEP
天井	デッキプレート h=50mm UP
ダイニング・ベッドルーム	
床・壁	ラーチ合板 t=12mm OS
天井	ラーチ合板 t=9mm OS
サンルーム	
床	ラーチ合板 t=12mm OS
壁	PB t=12.5mm AEP
天井	デッキプレート h=50mm UP

0 1 2m
1/100



3F



2F

ホール。3層吹抜けの5
m以上の天井高さのある
空間。このホールに近所
の子どもたちが遊びに来
ることもあるという。





特集／入れ子の家——壁を並べ、屋根を重ねる

ケーススタディ3

古い町家の中に、新しい小町家を挿入

作品

オフセット町家

設計

大井鉄也

Special Feature
Double
Housing

Case Study

3



"OFFSET-MACHIYA"

築65年ほどの町家の改修。伝統構法の町家の中に、家型の「小町家」が挿入されている。

歴史的な街並みのなかでは、古い町家はできるだけ残していきたい。

ただ、町家の中は寒い。

古い町家を継承しながらも、現代的な暮らしをしていくために、構造補強を兼ね、断熱の施された「小町家」が、組み込まれた。

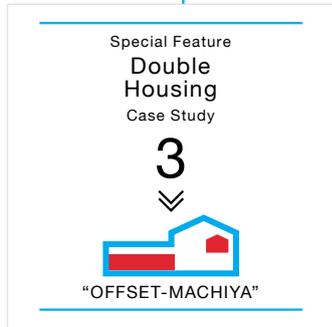
細長い町家を 形式とともに 受け継ぐ

機能と性能、また意匠の向上、そして建物と街並みの継承。すべての要件が合わさることで、「オフセット町家」は必然性をもって生まれた。

琵琶湖の北東に位置し、北陸と近畿を結ぶ北国街道の宿場町として栄えた滋賀県の木之本。商家が続く街道の、端に位置する2階建ての建物が改修された。この建物は65年ほど前に建てられたもので、地方の町家の形式を引き継いだ配置と内部空間をもつ。敷地の間口は12m、東西方向の奥行きは50m。街道側には接客空間が面し、敷地奥に向かって長い通り土間が貫き、生活空間と庭が配されていた。改修設計をした大井鉄也さんは

「少しずつ手を加えながらも、元の形式をできる限り維持するように努めました」と語る。

「この地域で住みつづけるにあたって、家をつないでいこうと思った」と言うのは、建主の西村さん。生まれ育った地元で、人気のペーカリーの工場長として働く西村さんは、曾祖父父母が建てた家を引き継ぐことに。接客空間で目にする水色や黄色に塗られた漆喰壁、立派な一本物のケヤキの梁などは、想いを込めて丁寧につくられたことを物語っていた。しかし、西村さんが子ども頃から遊びに来ていたときの思い出は、暗くて寒いイメージ。また、小さな子どもたちを含めて家族4人で暮らすには、1階だけでは狭く、2階も含めた全体だと広すぎる。何より、しばらく空き家となっていた家すべてを改修していくと仕上げは別物になるし、コストが膨大にかかってしまう。大井さんと



西村さんは、するべきことの重要度を見きわめ、優先順位を決めていった。

街道側の外観では、ベンガラや漆喰を塗り直した。景観条例にもとづく補助金を受けられたこともあり、あえて補修程度としている。玄関を入った土間に続く通り側のスペースは、畳間を廃して土間空間に。床組のシロアリ被害が大きかったことと、椅子座に対応できるようにするためだ。街道に沿った表土間の空間には、もともとここで使われていたソファなどが置かれていた。表土間に隣りあう奥には、畳敷きの続き間を残した。このエリアまでは、街の人が集まるときには開放される。ここから奥が施主家族のプライベートゾーンで、視線を制御する熱線反射ガラスや扉で仕切られる。そして通り土間は、手前の玄関土間からLDKと水まわり空間をつなぐようにまっすぐにのびている。

「小町家」はアルミシルバペイントで塗られている。古いものと、新しく挿入したものが、はっきりとわかるように区別したため。

新旧を 共存させる 「小町家」計画

通り土間がほぼ元の状態であるのに対して「小町家」と大井さんが呼ぶ生活空間は、新たにつくられたもの。敷地の形状に沿ってゆるやかに傾斜のついた通り土間を見通すと、外壁側の既存壁は柱の現れた真壁で、小町家側は合板の張られた大壁が続く。小屋組が現しとなった通り土間の上部では、屋根瓦の一部がガラス屋根に葺き替えられ、天空からの日光が射し込む。新旧が共存する印象的な土間

を進んで小町家の中に入ると、LDKが一体となったワンルーム空間が現れる。元は床が同一レ



写真上／木之本宿の街道筋に立つ町家の改修。外観はオリジナルのまま。左／「小町家」内部の寝室1。既存の木製建具の内側に、断熱性能の高い内窓が新設されている。





写真下／「小町家」内部の寝室2。将来は子ども部屋になる予定で、壁は黒板仕様。

古い小屋梁とともに、銀色の家型が置かれている。
新しいものと、古いものが、
お互いの役割をもって、共存している。



ベルであったが、敷地の傾斜に沿って床面は段々状に設定。床組みの損傷が進んでいたことから、改修時には上部構造を持ち上げて基礎コンクリートも打ち直されている。庭側には縁側が続いていたが、LDKに取り込まれた。そのぶん、通り土間側では奥行きのある収納が設けられている。

この小町家は、床と壁に高性能グラスウール、床に押出法ポリスチレンフォームが施され、断熱された外皮をもつ空間である。一方で、既存の町家や土間には断熱材を施さず、空調も基本的にはしない半屋外空間とされている。「既存の建築物と離し、浮いたようにする」という意味で、オフセットという言葉を使いました」と大井さんは説明する。両者を明確に切り分けることで、既存の町家、土間の仕上げや性質を持続させることができる。同時に、普段は小町家という小さな空間に住むことで、改修にかかると初期費用だけでなく冷暖房にかかるランニングのコストを抑えることができる。「快適で軽やかに暮らす、現代的な町家を目指しました」と大井さん。なお、LDKの奥には洗面脱衣室と浴室、トイレが続く。このエリアも小町家として設計されたもので、断熱性を確保。リフレッシュされた機器や水栓金物とともに、水まわり空間を毎日気

写真左ページ/1階の「小町家」の内部。天井や壁面では、グラスウールの断熱が施されている。床には、床暖房パネルを舗設。

持ちよく楽しんでいくという。

オフセットで生じるズレとつながり

オフセットという言葉には、基準となる線から距離をとる意味合いもある。その意味と効果をより意識できるのが、2階部分だ。和室と物置のあったスペースは、半外部の板の間と納戸、トイレ・洗面、そして2つの寝室に分けられた小町家に改修。小町家が街道側に納められることで、2階の空間の重心は庭に面した板の間側に移動。

そして小町家の天井には、既存町家の屋根勾配に合わせて傾斜が付けられ、隙間をあけてつくられた。断面で見ると、まさに「町家の中の町家」。板の間で見上げると、小町家の上部で斜めに視線が抜けて広がりを感じられる。屋根下地のスギ板は適宜張り替えられ、既存瓦の合間にはガラス瓦がここでも設けられた。ガラスを通して降りそそぐ日光は、アルミ粉配合のシルバペイントで塗られた小町家の傾斜屋根や壁の外側に反射し、板の間をほんやりと照らしている。なお、2階小町家の床面は板の間よりも325mm上げて設定され、1階

の表土間と板の間はつながっている。1階と2階の半外部空間同士で、視線や空気が通ることが意図されたためである。また「寝室から板の間側を見ると、中庭の地面も視界に入り、中庭が以前と比べてより近くに感じられるようになった」と大井さん。床の高さの再設定に合わせて寝室の窓は、元は腰壁付きの高さであったものが掃き出し窓とされた。そして既存開口部には、内窓タイプの断熱サッシが付加されて断熱性が確保されている。

小町家が街とのつながりも生む

既存の町家と土間を半屋外ととらえてつなげていった結果、自然の風が通り抜ける家となった。玄関土間上部や階段部分は吹抜けになっており、表土間と2階板の間もつながっている。上下階の温度差で空気が流れる。「春、夏、秋は本当に快適ですね。夏もエアコンはほとんどつけません。子どもたちは家の中を走りまわっています。この家では初めての冬を迎えています」

「ああそうか、この冬は厳しかった」と実感し、小町家の中で過ごす時間

が長いですね」と西村さんは笑う。この地域では雪が多く降ることもあり、元の町家部分はさすがに冷え込む。そのぶん、床暖房のあるLDKや、エアコンが個別に設置された小町家では暖かさが身に染みるように感じられるという。

そして西村さんにとって、家族の快適性と同じほど重要な意味をもっているのは、街に対する町家の存在感とこれからの役割である。オフセットされた「小町家」をもって生まれ変わることで、この町家は室内だけでなく街に対しても抜けが生まれ、街との接点がこれまで以上に強まっている。表土間はすでに、地域の「街並研究会」の会場として定期的に使用。これは地元の高齢者が若い人に歴史を伝えていく会として発足したもので、今後のまちづくりにも寄与することが見込まれている。また、地元書店による本の読み聞かせの会やギャラリ―として展示会も開催される予定だという。「長い時間を経てつくられた建築は、昔の姿に戻す復原の文脈ではなく、オフセットという手法でより体系的に操作できるのではないかと。そんな感覚をつかんでいます」と大井さん。街全体で使われ愛される持続可能な建築の姿は、この「町家の中の町家」から生まれようとしている。

Special Feature
Double Housing
Case Study

3

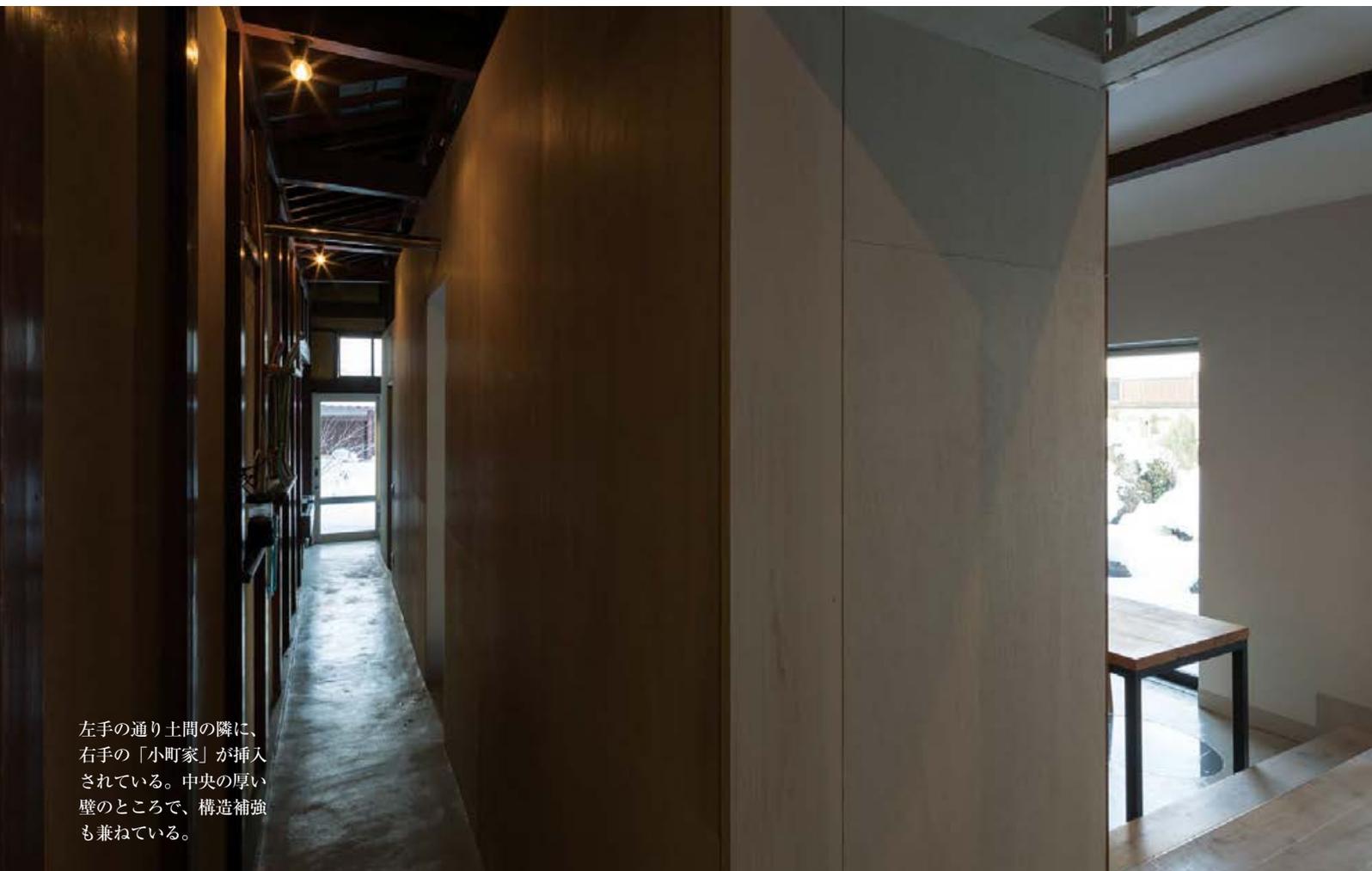


"OFFSET-MACHIYA"



写真上／1階の「小町家」の内部にある食堂・台所。床の円形部分には今も使用している井戸がある。

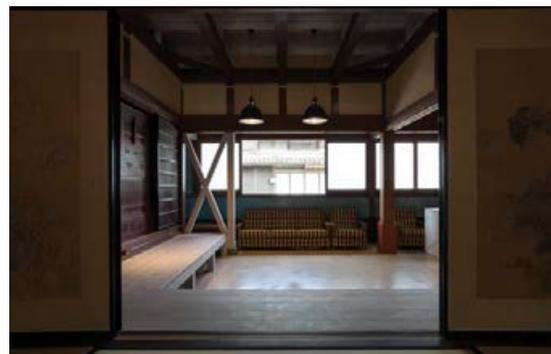
昔ながらの町家のよさを損なわないように、断熱を施し、構造補強を行い、新しい暮らしの設備を入れていく。「小町家」が、その新しい機能を担った。



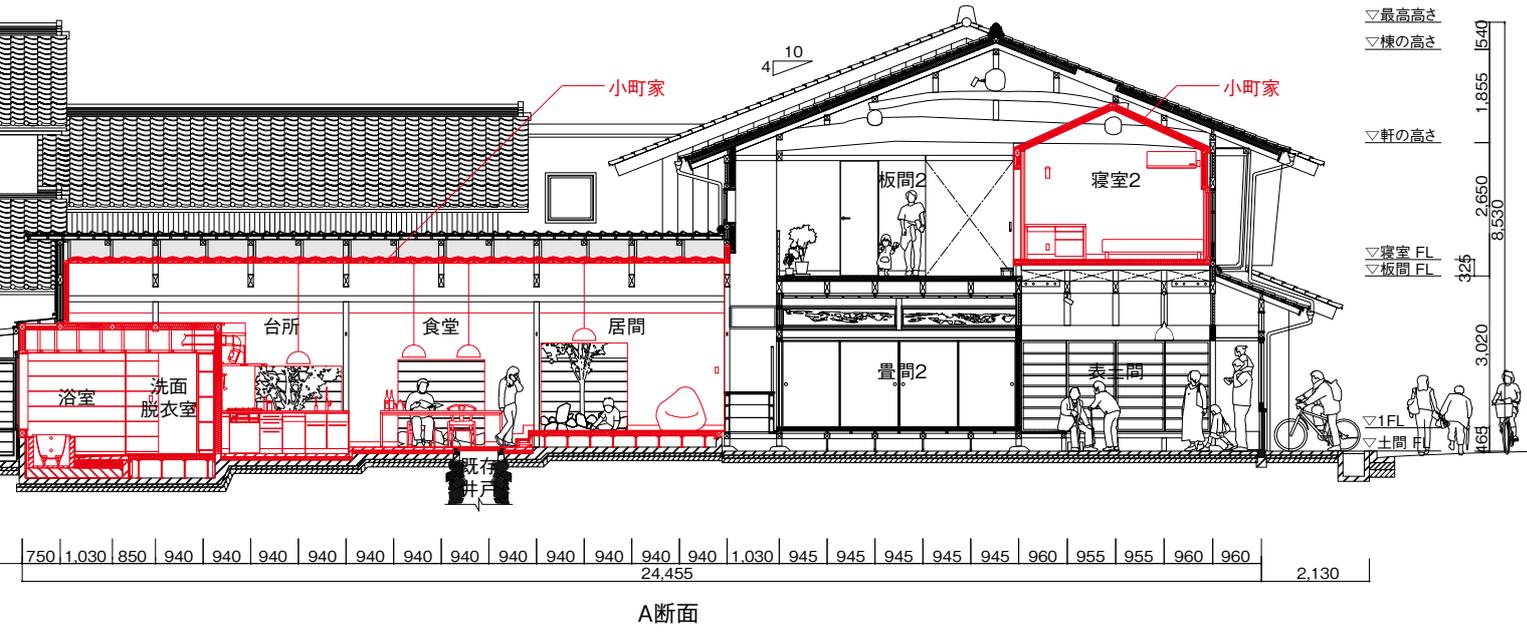
左手の通り土間の隣に、右手の「小町家」が挿入されている。中央の厚い壁のところで、構造補強も兼ねている。



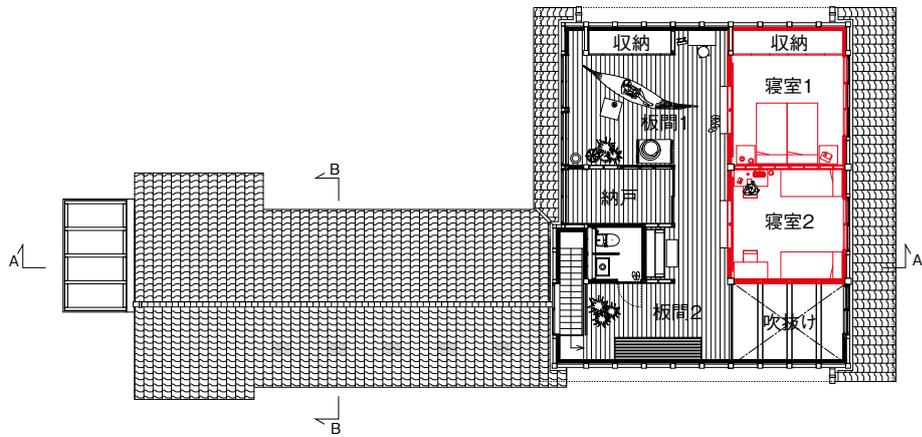
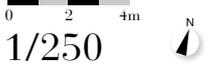
写真右／1階畳間から表土間を見る。中／前室から畳間を見る。床の間のある畳間1と畳間2とが続き間になっている。左／表土間。地域の人が集まれるパブリックスペースになっている。構造補強の筋かいは、新しい材料であることがわかるように白く塗装している。



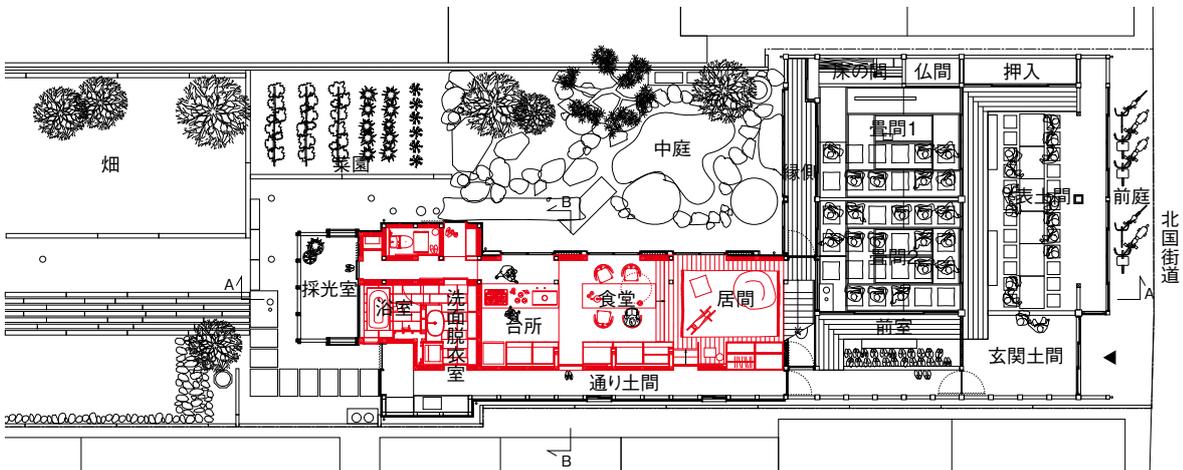
断面図



平面図



2F



1F

「オフセット町家」



玄関から見た通り土間。

建築概要

所在地	滋賀県長浜市木之本町
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人
設計	大井鉄也/大井鉄也建築設計事務所
構造設計	MID研究所
設備設計	Comodo設備計画
構造	木造伝統構法(石場建て)
施工	トクエホーム(西川技建工業)
階数	地上2階
敷地面積	568.41㎡
建築面積	246.19㎡
延床面積	393.51㎡
設計期間	2015年6月~2016年3月
工事期間	2016年6月~2017年2月

おもな外部仕上げ(外側の建物)

屋根	既存瓦葺き(一部葺替え)
外壁	既存漆喰壁補修、 既存木部ベンガラ塗装、 カラーガルバリウム鋼板波板 (平屋部分)
開口部	既存木製建具、木製建具、 アルミサッシ

おもな外部仕上げ(内側の建物)

屋根・壁	ラーチ合板 t=9mm アルミシルバペイント塗り
開口部	アルミサッシ(断熱・内窓タイプ)

おもな内部仕上げ

台所・食堂

床	コンクリート t=60mm 金ごて仕上げ 表面強化仕上げ材塗布
壁	ラワン合板 OS、PB t=12.5mm クロス、黒皮鉄板 t=1.6mm クリア塗装
天井	PB t=9.5mm クロス

居間

床	スギ無垢板張り OS
壁	ラワン合板 オイルステイン塗り、 PB t=12.5mm クロス
天井	PB t=9.5mm クロス

玄関土間・表土間・前室・通り土間

床	コンクリート 金ごて仕上げ 表面強化材塗布
壁	既存漆喰塗り保存、既存木部現し
天井	既存木部現し、 針葉樹合板 アルミシルバペイント、 硝子瓦トップライト

畳間・縁側

床	和紙畳、スギ無垢板張り OS
壁・天井	既存

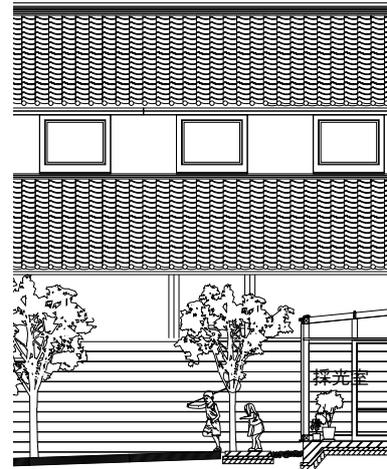
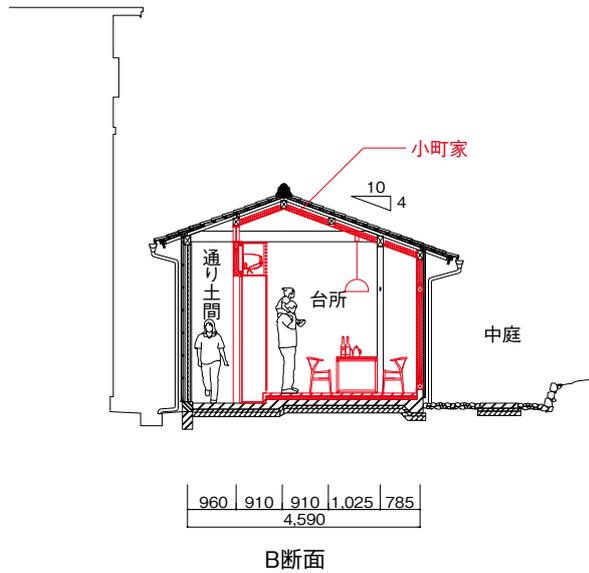
寝室・納戸

床	スギ無垢板張り OS
壁	PB t=12.5mm クロス、既存木部現し
天井	PB t=9.5mm クロス、既存木部現し

板間

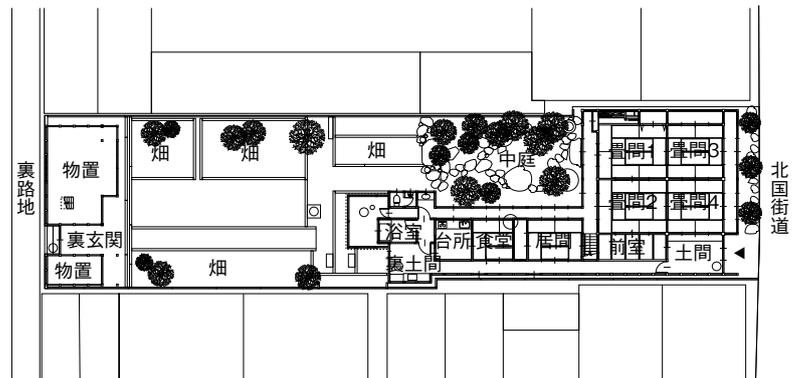
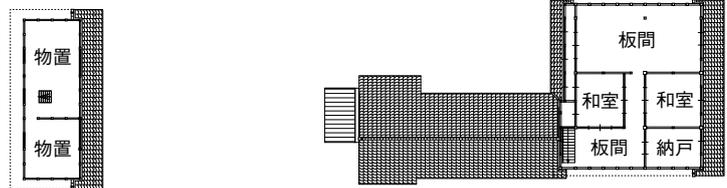
床	スギ無垢板張り OS
壁	ラワン合板 アルミシルバペイント、 PB t=12.5mm クロス、既存木部現し
天井	既存木部現し、硝子瓦トップライト

0 1 2m
1/150



改修前平面図

0 5 10m
1/500



Oi Tetsuya

大井鉄也

おおい・てつや/1978年滋賀県生まれ。2001年滋賀県立大学環境科学部環境計画学科卒業。03年同大学大学院修士課程修了。03年内井建築設計事務所。09年遠藤克彦建築研究所。12年大井鉄也建築設計事務所設立。12~17年東京大学生産技術研究所特

任研究員。おもな作品=「東京大学生産技術研究所アニヴァーサリーホール」(13、今井公太郎・遠藤克彦と共同設計)、「つるやパン本店リニューアル」(14)、「つるやパン二号店 まるい食パン専門店」(16)。





7つの小屋が、ひとつの大きな屋根で覆われている。雪や雨、寒風、強い西日などから、大屋根が内部を守っている。

特集／入れ子の家——壁を並べ、屋根を重ねる

ケーススタディ4

小屋の上に、大屋根をかける

作品 雨やどりの家 設計 三宅正浩 + 吉本英正

Special Feature
Double
Housing

Case Study

4



“Rain Shelter House”

夫婦と子どもたち、そして祖母が同居しながら、
それぞれが自分の小屋をもち、
適度な距離を保って、暮らしている。
それは小屋群の村のようでもあるが、それらが、より大きな屋根に
覆われることによって、ひとつ屋根の下で暮らす、
家族の器にもなっている。



大屋根の下にある小屋群。右手が玄関の小屋、中央が水まわりと書斎の小屋、左手が主寝室の小屋になっている。

雨は、空から降ってくる。あたりまえのようだけれど、家はそうした日々の自然環境から身を守るために、その形を変える。そうした意味でも、屋根は地域性が最も表れる形のひとつだろう。「雨やどりの家」の敷地は、伯耆富士として知られる大山の麓に位置し、冬には強い風が吹きつけ、また雪の多い地域に位置する。

この家にかげられた、大きな折板の屋根もまた、こうした自然から家族を守るための形だ。軒の深い、大きな屋根はこの地域の特徴でもある。しかし、周辺の住宅と、この家とが決定的に異なるのは、大きな屋根の下に分棟で配置される部屋もまた、屋根をもっているということだ。この大きな折板の屋根が、自然環境を住環境へと変える役割を担っているとすれば、はて、この小さな屋根はどんな役割を担っているのだろうか。そのヒントは、屋根と屋根との隙間に隠されていた。

大屋根と 小屋の隙間

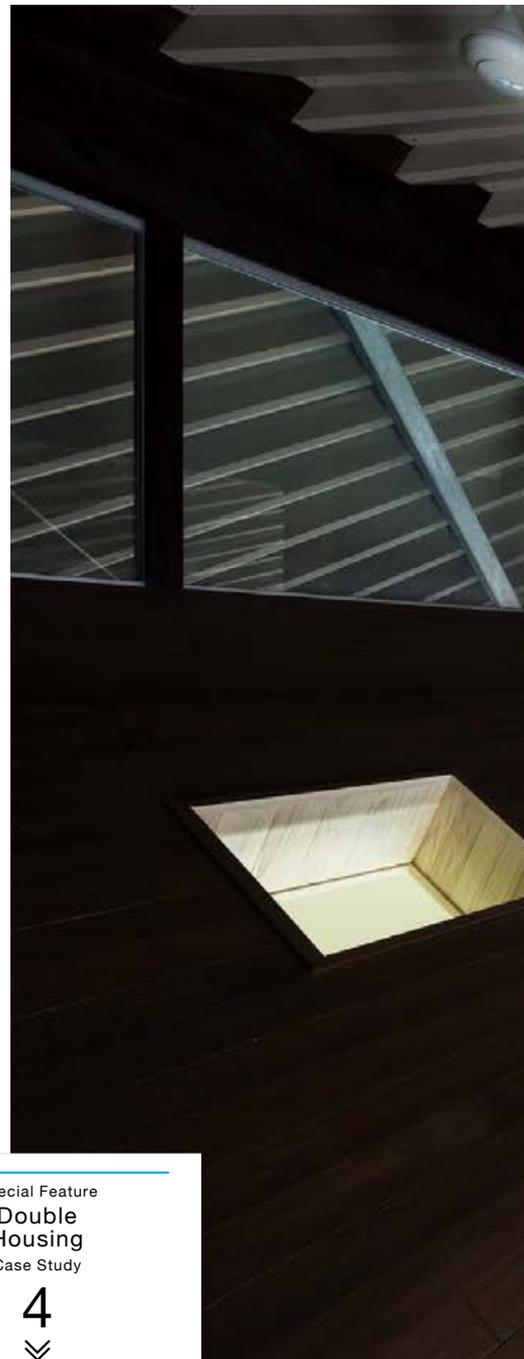
この家の立つ鳥取県米子市は、年間をとおして降水量も多く、冬にはたくさん雪が積もる。さらに、敷地の西側は崖になっており、夕方には強い西日を浴びる。このようにさまざまな方向からくる、雨に雪、そして日差しから、住環境を守るために、大きなひとつの折板の屋根が、まずは計画されたのである。

この折板屋根の天井は、最も高いところで7mほどもある開放的な空間だ。しかし



ダイニング・キッチンと子ども部屋のある小屋。大屋根では、折板のあいだに断熱材がサンドイッチされている。

大きな屋根の下に、
たくさんの小屋が、村のように集まっている。
一つひとつの小屋が部屋というより、
まるで家のようなだ。



Special Feature
Double
Housing
Case Study

4



"Rain Shelter House"

開放的すぎても、生活するには落ち着かない。それは誰も同じだろう。そのため、各部屋にはそれぞれ屋根がかけられ小さな空間をつくっている。その姿は、まるで小屋のようだ。

その「小屋」の配置を見ると、南側の玄関側に寄せられているのがわかる。また、窓も少ない。本来ならば、南から光を取り入れるべく、南側に向けて、広い開口をもつべきなのだろう。しかし、そこは三宅さんの建築家としての勘が働いた結果だ。設計時には、南側には同様に売りだされていた土地が残っていた。そうした状況がこれからも続くのであれば、南に開くことも考えられただろう。しかし、もしこの先、ここに何か住宅が建てば、途端にこの家は他人の視線にさらされてしまうだろう。そう三宅さんは考え、あえて南には開かないという決断をした。ただし、その代わり、大きな屋根と小屋の屋根、その隙間から光を取り入れることにしたのである。そのねらいどおり、日中、日差しは、大屋根と小屋との隙間から差し込む。また小屋は外からの視線も適度にさえぎってくれる。光を取り込みながら、プライバシーも担保できる、このふたつの屋根ならではの解決法が生まれた。

雪と折板の向き

この大きな折板の屋根であるが、その波目の向きは、梁の方向と直行せず、斜めに取り付けられている。それは、水処理の仕方に理由がある。屋根に積もった雪は、い

ったんは屋根の上に留まる。それが晴れた日に、日差しによってとかされていくのだが、せつかくの晴れの日に、ポタポタとした水を、玄関にたらしたくないと考えた。そこで、折板の向きを45度振ることで、玄関から反対側に流せることに気がついたのだ。雪解けの水、また日々の雨も、玄関とは反対側に流れる。西側の軒に設けられた雨どいを通して、水は、屋根が地面まで接地する一カ所に集められて、雨水樋に流れ込んでいく。

こうして、玄関の軒樋をなくすことができたため、折板のヒラヒラとした断面形状がそのまま見え、この家の特徴にもなっている。屋根の一部には、メッシュやポリカーボネートをスリット状に入れることで、

大きな屋根ながらも、その下に光が差し込む配慮もされており、屋根のアクセントもなっている。一見、突飛とも思えるこの屋根の形状も、こうした設計の経緯を聞くと、自然に対する素直な造形の結果なのだと気づかされる。

友だち未満で なんでも言える関係

しかし、大屋根をかけるという大胆な設計を、建主はすぐに受け入れてくれたのだろうか。ほかにどんな案があったのかと

質問すると、予想外の答えが返ってきた。

「代替案などありません。私たちが提案するのは、いつもひとつだけ」と三宅正浩さん。事前に十分に建主の要望を聞けば、自ずと案はひとつになっていくのだ、と言う。そうしたプロセスが踏めるのも、パートナーである吉本英正さんの存在が大きい。吉本さんはプロジェクトマネジャーという立場で、三宅さんとともに事務所を共同で立ち上げた。「他業種であれば、本当は営業の方や、マネジャーがいるものです。技術屋であり、芸術家でもある建築家が、マネジャーまで行くと、どこかで矛盾をきたしてしまうのではないでしょうか」と語る。

さらに、ファイナンシャルプランナーとしての顔ももち、土地探しから依頼されることも多い。建主だけで土地探しを行うと、どうしても土地にお金をかけすぎて、それが工費を圧迫してしまうなど、そのバランスに苦労する。設計事務所が、土地探しからフォローすることができれば、その場所にあった家のイメージを一緒に描きながら、予算のバランスを考慮することができる。この家も、そうして敷地を選ぶところから始まった。いくつもある候補のなかには、より広い面積の土地もあったという。決め手となったのは、

高台から西側に開けた、森のような史跡公園への見晴らしだ。この景観を生かすことで、狭いながらも、それ以上に開放感のある設計を提案することができたのだ。

さて、土地が決まり設計に入ると、じっくりとヒアリングを行う。全体的な要望を聞くことから始まり、趣味は何か、将来どんな生活を望んでいるかと、時間をかけて聞き出す。それによって、本当に必要なものを見きわめていく。ヒアリングには、建築家の三宅さんも同席するが、基本的には吉本さんが一手に担うことにしているという。吉本さんによれば、その秘訣は「友だち未満で、なんでも言える関係」。1対1で信頼関係は築きつつも、少し離れた存在の専門家であることが秘訣だという。事務所に戻れば建主の代理人として、時に事務所内では三宅さんと激しく意見を闘わす。まるで、事務所内にも建主がいるような感覚であろう。

少々大胆な提案も、事務所内にいる吉本さんという「建主」の事前チェックがすすんでいるからこそ、本当の建主に対しても堂々と提案できるにちがいない。

家族だけが 共有するがらんとした空気

この家には、3世代が同居している。設計に入るにあたっては、やはり吉本さんによるヒアリングが行われた。ご主人の好みから少々無骨な折板の大屋根が、また奥さまの好みからかわいらしい小屋の立ち並ぶ現在の原型が、そのヒアリングのなかから着想されたという。また、家の格好に対するイメージと合わせて、建主からは、それぞれの生活をじゃますることなく、いっしょになげなく顔を合わせる、気を使わない同居がしたいという要望があった。そうした夫妻の要望は、二重の屋根のつくり方に反映されている。

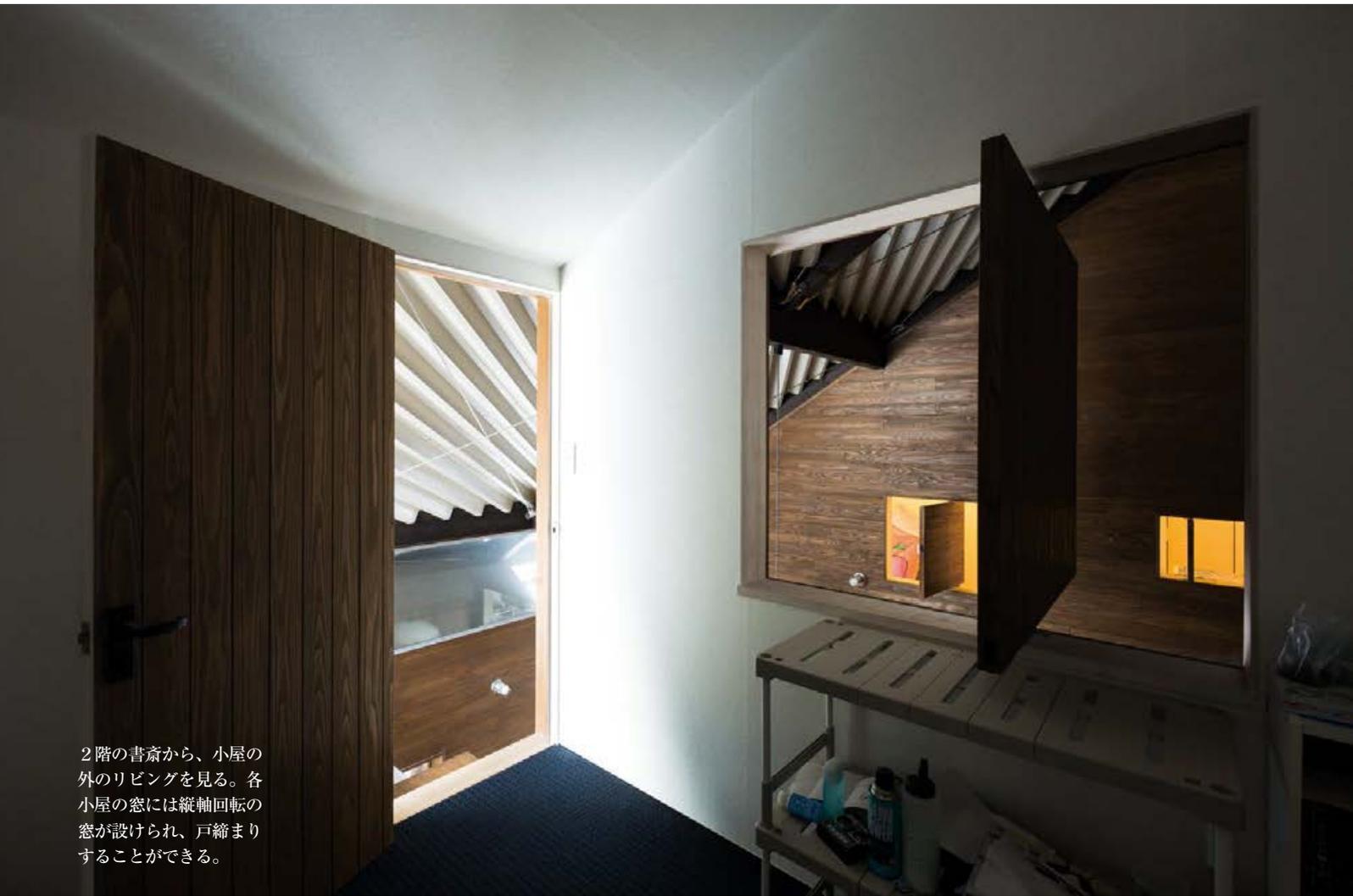
リビングにみると、まわりを家型の小屋に囲まれているからか、屋外にいるかのような不思議な錯覚がある。そこに、大きな屋根がかけられることで、なくすことができたものがある。それは廊下だ。一般的に、部屋と部屋とは廊下を介して結ばれている。あるいは日本家屋のように、襖を隔てて部屋同士が隣接する。しかし、この家は違う。小屋から、一步踏み出せば、そこにはがらんとした空気が上空まで漂っている。小屋と小屋とは、この空気を介してつながっている。誰のものでもない、この場所こそがいわば家族のためだけに用意された「外」。そこに漂う、家族だけが共有できる空気は、言葉を交わさずとも、家族を結びつけている。

Special Feature
Double
Housing
Case Study

4



"Rain Shelter House"



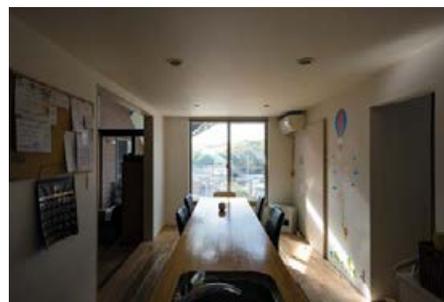
2階の書斎から、小屋の外のリビングを見る。各小屋の窓には縦軸回転の窓が設けられ、戸締まりすることができる。



写真左／中央に配置されているリビング。各小屋の「住人」が集うパブリックなスペース。

写真右／玄関脇の寝室。各部屋が小屋の形状をしているため、天井も家型になっている。

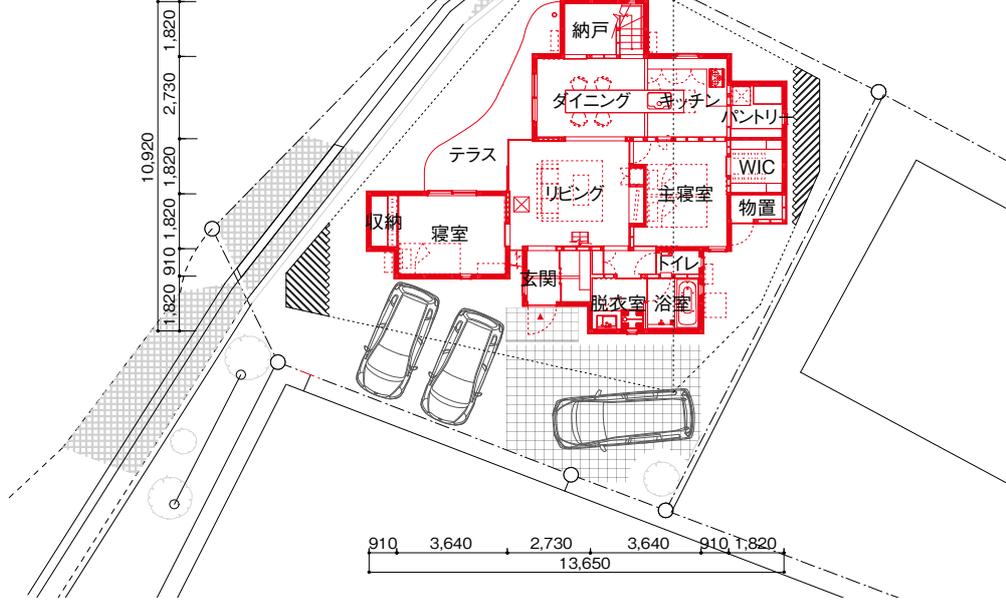
小屋の外は、リビング。
リビングも大屋根に覆われた室内だが、まるで室外のように感じられる。
家の中に、
外部が取り込まれている。



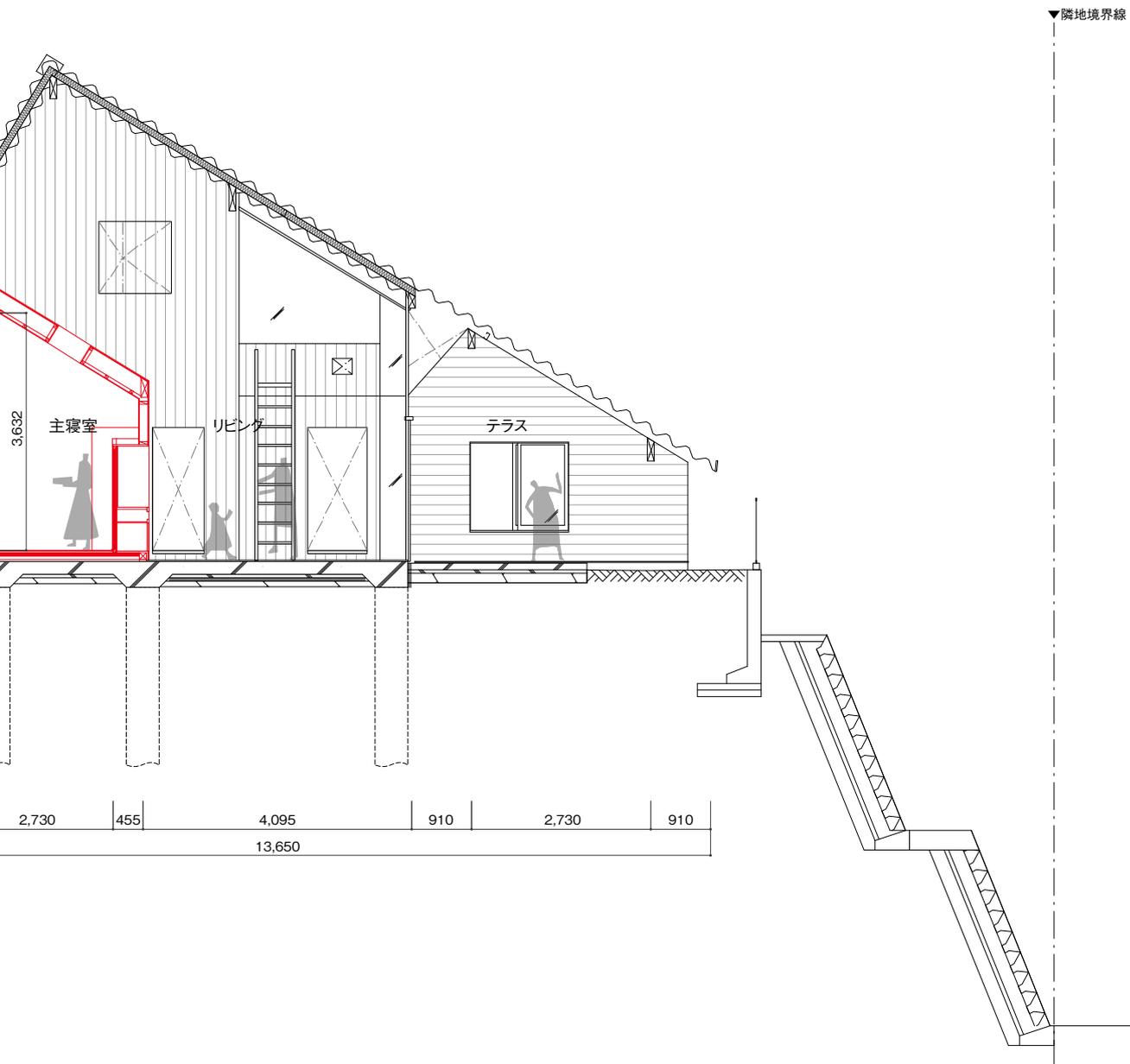
1階のキッチンとダイニング。傾斜地に立っているため、窓からは遠くの山並みまで見通せる眺望が開けている。

平面図

1F



断面図





南側外観。屋根の折板は、周囲のいぶし瓦と石州瓦の屋根に合わせて2色にしている。

「雨やどりの家」

建築概要

所在地	鳥取県米子市
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども2人+祖母
設計	三宅正浩+吉本英正/ y+M design office
構造設計	天野一級建築構造設計事務所
構造	木造
施工	ASJ米子スタジオ(平田組)
階数	地上2階
敷地面積	250.91㎡
建築面積	119.80㎡
延床面積	115.06㎡
設計期間	2011年11月~2012年5月
工事期間	2012年5月~2012年12月

おもな外部仕上げ(外側の建物)

屋根	金属折板、一部ポリカーボネート折板
外壁	スギ板羽目板張り t=11mm 木材保護塗料
開口部	アルミサッシ、木製建具

おもな外部仕上げ(内側の建物)

屋根・壁	スギ板羽目板張り t=11mm OS
------	--------------------

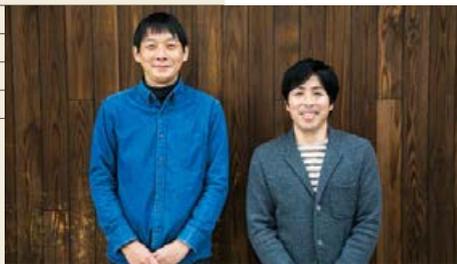
おもな内部仕上げ

リビング

床	モルタル金ごて仕上げ
壁	スギ板羽目板張り t=11mm
天井	金属折板現し
キッチン・ダイニング・主寝室・寝室・子ども部屋	Pタイル t=2mm、 スギフローリング t=11mm
壁・天井	ビニルクロス

書斎

床	カーペット
壁・天井	ケフナ和紙



Yoshimoto Hidemasa

吉本英正

よしもと・ひでまさ/
1974年徳島県生まれ。97年神戸大学経済学部卒業。97~2003年積水化学工業近畿住宅支店。03~06年同社化学品部門。06年y+M design office 共同設立。

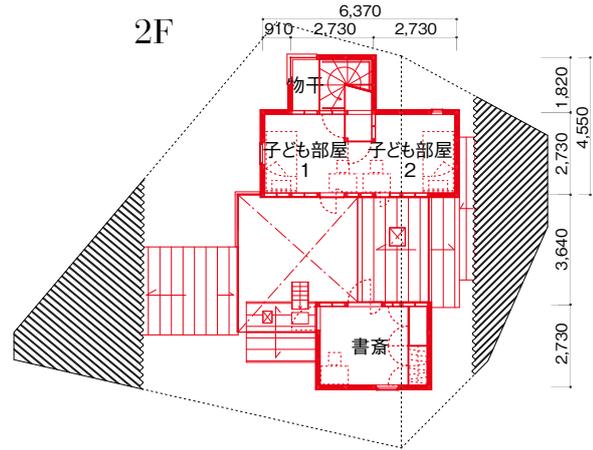
おもな作品=「滑の家」(11)、「軒下の家」(13)、「折り壁の段床」(15)。

Miyake Masahiro

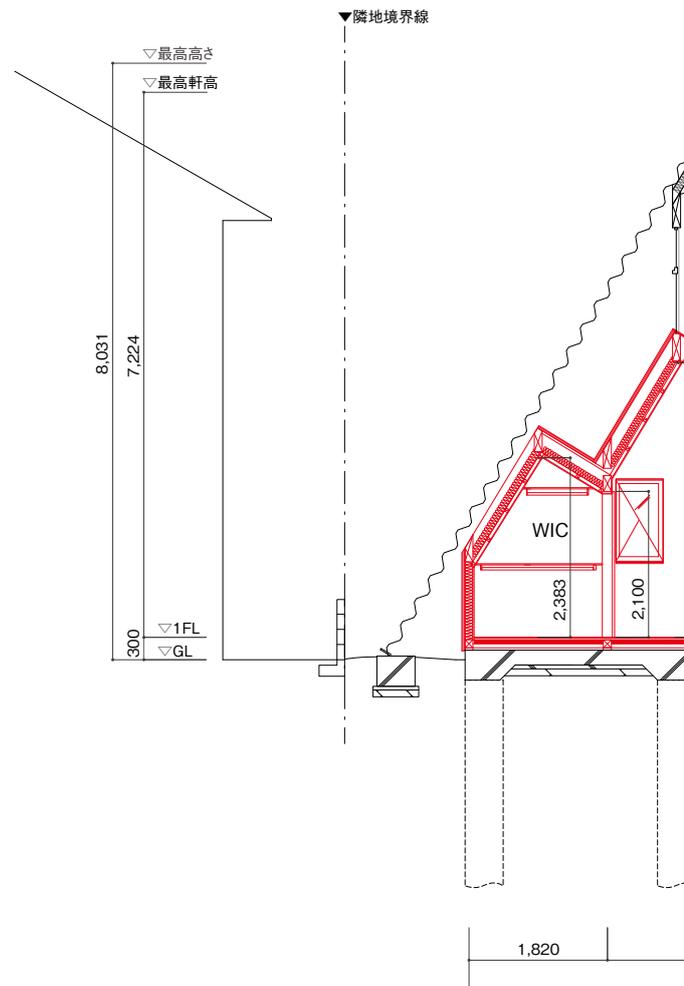
三宅正浩

みやけ・まさひろ/1974年鳥根県生まれ。97年大阪市立大学工学部土木工学科卒業。97~2002年積水化学工業近畿住宅支店。03~06年宮本佳明建築設計事務所。06年y+M design office 共同設立。14年、成安造形大学特任准教授。

0 2 4m
1/250



0 1 2m
1/100



エージングいっばいのゲストルーム

およそ最近新しくつくられたホテル建築などは出来上がったときが一番美しく、だんだんみずぼらしくなっていく。つまり経年で味が出てくるような「エージング」を期待できないだろうというものがほとんどであり、時間は空間づくりのテーマになっていない。

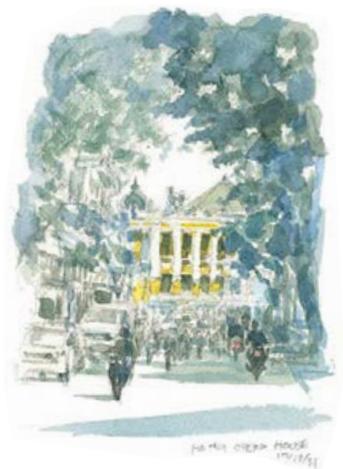
ノイバイ国際空港から車で40分。ホアンキエム湖周辺、増田彰久さんの写真集（*1）でよく見たイエロー・オーカー色（*2）に塗られたコロナアル建築が多いフランス地区。まぶしいほどの白亜のホテルに到着。夕刻になるとクリスマスが近いせいでイルミネーションがいっばいに飾られ、それをバックにウエディング姿のカップルが何組も撮影をしている。

1901年創業というから帝国ホテルのライト館より古い。インドシナ半島では最高級コロナアル・ホテルの代表格として歴史がある。フランスが敗北してベトナム撤退となったデイエンビエンフーの戦い、日本軍の進駐、アメリカとのベトナム戦争などを経験し、それらが綴られた書で展示されている。開業当時の写真を見ると、ホテルにはマンサード風の屋根がのっていたことがわかる。

皿を壁面いっばいに並べた少し薄暗いフロント・レセプションでチェック・イン。オペラ座側ではなく、公園に面したヒストリカル・ウイングに投宿。

飾り卓にデスク照明が並ぶ客室廊下は、設備点検扉まで厚い南洋材の木できていて重厚。塗装もほとんど全艶。

ここは各室バルコニー付き。部屋の天井高は3mを超え、天井ファンがコロナアル建築らしく気だるくまわる。ドレパーリー・カーテンなどウインドー・トリートメントは正



オペラ座正面に
至る道。
ハノイは緑が多い。

統。キーこそカードキーになっていたが、木のドンデイス・サイン（*3）は大きい。家具の取っ手など建築金物もいろいろおもしろい。手の跡を感じる。ベッド足元には小ぶりのカウチ。何度も改装されたと思われるが使い込まれたそこかしこに美しさと安心感が漂う。年月のなせる業。

比較的新しいバスルームにはFRPの大きなタブと一面の鏡。アメニティはエルメス。ワードローブもそうだが、カフェカーテン付きの両開きドアがフランス的。

ホテルの中院ではノンララー（*4）と呼ばれるたくさんの笠でつくられた大きなクリスマスツリーの下で、少数民族の女性たちが精緻なステッチやろうけつ染めの布地を売る店を出して、つい買ってしまった。

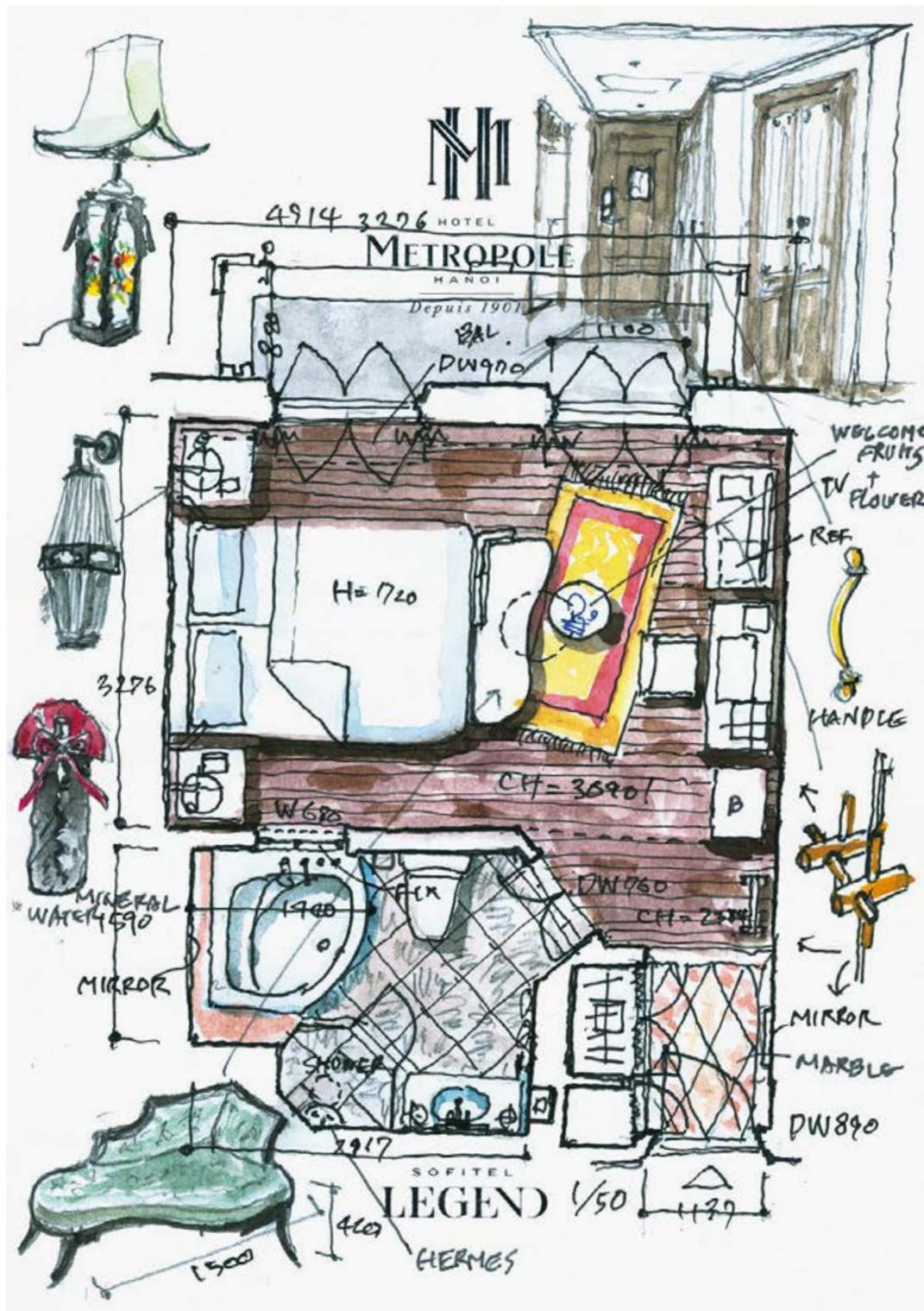
さて、黄土色の建物や市場を見て歩き、旧市街でバイクの洪水に身を投じて、おいしいフォー（*5）やブンチャ（*6）などを求めて探し歩くとするか。

- *1 「建築のハノイ―ベトナムに誕生したパリ」（写真／増田彰久、著／大田省、白揚社）
- *2 Yellow ochre：フランス南部の建物に多く塗られた酸化鉄の黄土色塗料。フランス語ではオーケル。
- *3 ドンデイス・サイン：ゲストルームの外側に下げるドアサインプレート。DO NOT DISTURBSサイン。
- *4 ノンララー：ラタニアの木の葉でつくった円錐形のベトナムの帽子。
- *5 Pho：米粉でできたベトナムの麺。あつさりした出汁につみれパクチャーなどをのせて食べる。
- *6 Bun Cha：つくねや焼いた豚肉などの鍋を「つけめん」のようにして食べる。野菜もたっぷり。



ドンデイス・サインプレート。長さは450mmもある。

うら・かずや／建築家・インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京藝術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99〜2012年日建スベイスデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。著書に「旅はゲストルーム」（東京書籍・光文社）、「測って描く旅」（彰国社）、「旅はゲストルームII」（光文社）がある。



バスルームは
 リノベーションされているが、
 各所の両開き建具などに
 フランス風が残る。

Sofitel Legend Metropole Hanoi

Add/15 Ngo Quyen Street, Hoan Kiem

District, 10000 Hanoi, VIETNAM

Phone/+84 24 3826 6919

URL/<http://www.sofitel.com/gb/hotel-1555-sofitel-legend-metropole-hanoi/index.shtml>

数寄屋造の

kyofudo

去風洞 設計／西川一草亭

Nishikawa Issotei × Fujimori Terunobu



モダン化

1

水平の線と垂直の線の交差によりモダンな立体幾何学的秩序を生み出している。床の間の右手の土壁に釘を打ち花を生けるのが、一草釘。

現代住宅併走

第四十回

連載

文／藤森照信

Text by Fujimori Terunobu
Photographs by Fugo Hitoshi

写真／普後均

(西川一草亭のポートレイトを除く)



2

座敷の欄間が名高い「文字透かし」彫刻化を拒んだモダンな造形として知られる。

現代住宅 併走

Nishikawa Issotei × Fujimori Terunobu

西

川一草亭[〃]といっても、日本の伝統文化の近代化にほぼ関心がなければ知らなくて当然だろう。私もこの名を、堀口捨己の「岡田邸（1933）」を見に行つたとき、建築史家の横山正から初めて教えられ、さらに前回の「八木邸（30）」でも、八木さんから設計者の藤井厚二と一草亭との深いつながりを聞いた。

藤井厚二、堀口捨己という、伝統住宅の近代化に大きな足跡を残したふたりの建築家のことを深く考えるには、一草亭は欠かせない。名著『風流一生 花道去風流七世 西川一草亭』（淡交社）の著者の熊倉功夫先生の紹介を得て、八木邸に続き一草亭が自邸兼花の教場として建てた京都の（去風洞）を訪れた。

一草亭は、明治11（1878）年、由緒ある京都の花道家の家に生まれ、大正期以後、生け花の近代化に尽くし、茶道にも新境地を開いている。加えて、大正、昭和初期のヨーロッパ文化を知的ベースとした夏目漱石から谷川徹三に至る文化人や芸術家に伝統のなかのモダンな魅力を伝えるという大きな役目を果たしている。もちろん、藤井も堀口も「伝統と近代」という関心から一草亭とつながるが、どこがどうつながるのか具体的に触れた論考がこれまでにない。その欠を埋めるべく、去風洞

の小ぶりな門をくぐると、最初に迎えてくれたのはバナナの兄弟芭蕉。藤井は、夫人と一緒に入門し生け花を習っているし、堀口はしばしば訪れたばかりか、長逗留もしているというから、ふたりとも芭蕉で迎えられていただろう。利休も、芭蕉の葉を床に掛けたと伝えられ、戦後の前衛花道家の中川幸夫も利休へのオマージュとして試みているし、私も真似して「ニラ・ハウス（1997）」の茶室の「新軒」で挑んでみたが、即破綻。

式台も踏み込みもなく、茶室のような踏み石から一気に障子を開けて家の中に入り、座敷に通されて、十世家元の西川一橙氏の挨拶を受ける。この先、取材と撮影のあいだ、ずっと一橙・弥子ご夫妻は正座して控えておられ、ぶしつけな質問にも丁寧に答えてくださった。

座敷の床の間に座り、最初はどこをどう見たものか和室の見方の不明に戸惑ったが、しばらくして、やっと藤井作との共通性に気づいた。

和風の常に従い、まず畳の面が広がり、正面に床の間が立ち、左右には襖、上には天井面が視界を占めるが、全体を制御し部屋をひとつの空間としてまとめ上げるのは、各面をタテヨコに走る線と、そこから生まれる三尺ピッチの立体格子。

藤井作の空間の背後には立体

玄関の障子を開けるとすぐ畳の間。この異例な入り方はもちろん茶室に由来する。富岡鉄斎より寄贈の「去風洞」の書が架かる。

3



4

小ぶりの門を入ると、芭蕉が迎え、その左手が玄関。縁も式台もなく、障子を開けて直接上がる。



格子という近代的な幾何学が控えていること、それがモダンな感覚を可能にしていることを何度も指摘してきたが、ここにもそれがある。

というと、藤井も一草亭もベースにした数寄屋造と同じじゃないかと思われる読者がいるだろうが、違う。藤井、一草亭、そしてそれに続く堀口捨己、吉田五十八より以前の数寄屋では、床の間や欄干など施主と大工棟梁が自由に手を入れていい箇所には癖の強い造形が取り込まれるのが常だった。そうした造形的遊びが許されるからこそ、数寄屋は人々に好まれ、遊郭、旅館、料理屋、別邸専用のスタイ



ルとなっていた。

そうした造形的遊びを一草亭は意識的に抑えることに努め、その結果、生み出されたのが右手の襖の上に見られる一草亭好みのその名も「一文字透かしの欄間」だった。花鳥や山水を彫ることにより施主と棟梁の好みと腕の見せ所であった欄間を穴ひとつに化してしまった。

造

形的遊びを削りながら、しかし見る人の目に豊かな印象を与えるべく、選りすぐった皮付き赤松を床柱として、北山杉を床框として据え、端部をチュツと舐めるように手斧でハツって木目を露わにしている。

5

5 / 広い縁の空間の2階には半円の窓。庭の手前は茶室へ向かう露地の手水（ちょうず）鉢。
6 / 中潜（なかくぐり）の向こうに露地と手水鉢が見える。

6

床の間本体も、これほど大きい室床（むろど隅柱を塗り込む技法で、利休の待庵に始まる）は珍しいし、右手の土壁に直接釘を打って掛ける花は一草亭の発明になり、「一草釘」と呼ばれる。大きな室床といい、一草釘といい、花道家としては「草花を野に返す」ことを旨としたにちがいない。

数寄屋のモダン化を幾何学（立体格子）化により果たした座敷（客間）以上に興味深く眺めたのは、花の教場の外側の庭と庭に面した広縁と、広縁の一面の仏間と、その2階の開口部、要するに、建築の外側の造りだった。広縁から述べると、縁をひと



つのちゃんとした空間として扱っているのは、その一面に仏間が口を開けていることからうかがわれよう。加えて、軒の出が茶室式の化粧軒になり、縁に面する壁が芯柱ではなく、大壁なのも異例。藤井の「聴竹居」(28)の入口が土の大壁となっているのがかねてより来歴も意味も未詳であったが、同じことがここでも行われている。茶室における室床の思想を外壁に持ち出した、と考えるはどうだろう。庭に立ち2階を見上げて、一草亭の隠し物を見つけた思いがした。実弟の画家・津田青楓が描いた『去風洞十勝図』の最初に登場するアーチ状の窓である。

去風洞



建築概要

所在地	京都府京都市
主要用途	専用住宅
設計	西川一草亭
階数	2階
構造	木造
竣工	1926年

西川一草亭

にしかわいっそうてい／明治11（1878）年、京都の由緒ある花道の家に生まれ、去風流を継ぐ。伝統の生け花の形式性に反発し、自然の花の美しさを生かすことを目指し、明治末年以後、新しい花の領分を開き、一家を成した。夏目漱石、浅井忠、建築家としては藤井厚二、そして堀口捨己と親しく交流している。住宅建築と庭を自分の好みを入れてつくることも試み、自邸の「去風洞」や「鳥野邸」（1934）をデザインし、後者の応接間は堀口が手がけている。昭和13（1938）年、没。



写真出典／
『風流一生涯
花道去風流七世
西川一草亭』
（淡交社）

Nishikawa Issotei

藤森照信

建築史家。建築家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞＝『明治の東京計画』（岩波書店）で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険東京篇』（筑摩書房）で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸（ニラ・ハウス）」（1997）で日本芸術大賞、『熊本県立農業大学校学生寮』（2000）で日本建築学会作品賞。



Fujimori Terunobu

8

7／庭と室内をつなぐ縁の扱い、とりわけ縁の手すりは堀口捨己に強い影響を与えている。8／縁の右手には流祖去風像。隅の壁は塗りまわしになっている。この場に生まれた空間のモダンさに注目。9／花の教場。左手の板の上に花を置き、そこから花を取ってきて生ける。

7

9

併住現代
走宅代

Nishikawa Issotei × Fujimori Terunobu

円窓はあっても半円窓は数寄屋にはなく、大正期のドイツ表現派的な美学が強くにじむ。庭についてはこのたび初めて目にし、強い印象を受けた。かつてもっと広がったことが津田の画帖からわかるが、現在、残っている一部を見て、石の姿も配置も、まわりの植栽も、庭を野に返そうとしていた。こんな庭は一草亭以前に例はない。唐突にいうが、一草亭は生け花と庭と建築の3つからなる数寄屋造という伝統の様式を、利休の目を借りて洗い直し、モダン化しようとしたのではない。一草亭と藤井の共通性はそのにあった。

去風洞完成大正15（1926）年、聴竹居竣工昭和3（28）年。藤井は、一草亭の建築をにらみながら設計を進めたのだろう。なお、一草亭の影響は、藤井より堀口のほうが決定的に受けている。とりわけ、室内から庭への展開のあたりは。

日比谷パークフロント

HIBIYA PARKFRONT

昨年5月、東急不動産がケネディクス、日本政策投資銀行と共同で開発にあたったオフィスビル「日比谷パークフロント」が完成した。敷地は日比谷公園の南に隣接するという抜群のロケーションで、じつはかつて日本長期信用銀行の本店ビルが立っていた場所だ。旧長銀ビルといえば、オーバーハングした独特の外観を記憶している人も多いだろう。

1993年竣工と築年数はさほど古くはなかったが、もともと銀行の本店ビルとして建てられたため、そのままではテナントとして貸せる面積が少なく、改修よりは建て替えて不動産価値を高めたほうがよいという判断に落ち着いたと東急不動産の仲神志保さんは振り返る。

新たなオフィスビルの開発コンセプトは「On the Park（公園の中のオフィス）」。

も、新目黒東急ビルや本連載でも紹介した新青山東急ビルなど、

屋上庭園、バルコニー、テラスといった多様な緑を積極的に取り入れたオフィスビルを開発し、好評を博している。その背景について、仲神さんはこう語る。

「東急グループは数あるデイベロップのなかでも人の暮らしに近い会社だと思っていますので、単にいい箱をつくるのではなく、そこで働く人が居心地のよさを感じる『居住感』がある空間をつくっていきたいと日頃から考えています。グリーンはその解決手法のひとつです」

オフィス内の 随所に 植栽を配す工夫

具体的に植栽に力を入れたのは、まずビルの足元の外構だ。南北に細長い建物の四周を囲むように多種多様な植物が植えられ、通行人にも緑豊かな環境を惜しみなく提供している。とくにガーデンプロムナードと名づ



外観。ガラス張りのファサード。



北側エントランス。視線の先に日比谷公園。



オフィス執務室。周囲の眺望にすぐれている。

公園の緑を 身近に感じる オフィスビル

けた遊歩道のある東側は、内と外を仕切るガラス面の足元が室内側に食い込むように斜めに傾いており、プロムナードの幅を確保しつつ、2階の天井を広く見せる意匠としている。

2階ロビーでは、屋内にも低木や観葉植物が随所に配され、視線の先にはガラス越しに日比谷公園の緑が連続するというゼいたくさ。眼下に日比谷公園が見えるオフィスの執務室の開放感もすばらしい。圧巻は広大な屋上のスカイガーデン。日比谷公園ばかりか皇居の緑も一望できらうえ、テナント専用朝食を提供するホテル並みのラウンジまで併設。仕事に戻るのを忘れそうなほど、リフレッシュ気分満点のスペースだ。

設計を手がけたKAJIMA DESIGNの浅見邦一さんによれば、東急不動産と設計担当のスタッフは開始当初から週2回の定例会議を行い、密度の濃い打ち合わせを継続してきたという。

「屋外だけでなく屋内にも緑を

取り入りたい、1階から2階に

上がる途中で緑が目がとまり、エレベータホールの先にも緑が見えてほしいといった東急側の要望に、技術的になんばってなんとかついて行った感じですよ」と笑う浅見さん。おそらく仲神さんの頭のなかには空間を移動するにしたがつて見えてくるシークエンスのイメージがあり、それを設計側がつかみとって形にしていったのだろう。エリアごとに照度や日照時間のシミュレーションを実施したうえで樹種の選定や人工照明による補充を行っており、植栽の管理も行き届いている。

女性の 要望に応えた パウダーコーナー

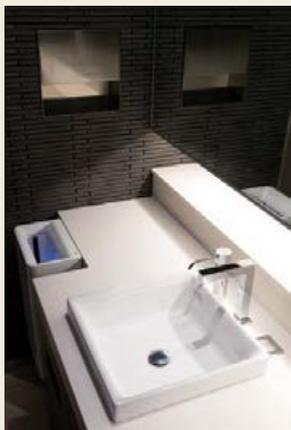
ところで、仲神さんがひとかたならぬ情熱を傾けているのが、基準階のトイレだという。

「今や働く人の4割が女性にもかわらず、オフィスビルのトイレはいまだにメンズライクな

女子トイレ



洗面コーナー。鏡上にはフェイクのグリーンと高窓を配した。



ペーパータオルとハンドドライヤーを完備。水栓は温水切り替えが可能。



パウダーコーナー。奥にオフィスでは珍しいフィッティングルーム。

男子トイレ



小便器とブースコーナー。奥に洗面。女子トイレと異なる内装材を使用。

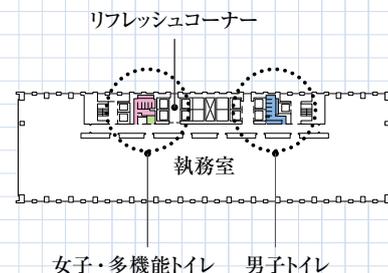
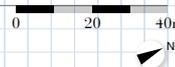
多機能トイレ



廊下に面しアクセスしやすい。オストメイト対応の汚物流しを設置。

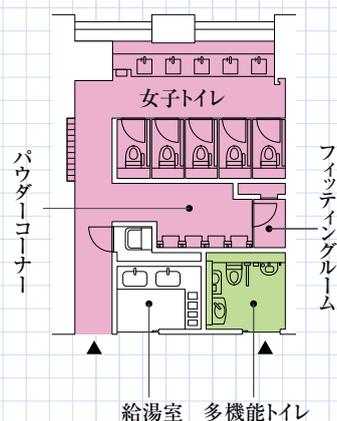
3F-20F オフィス基準階フロア平面図

1/2,000



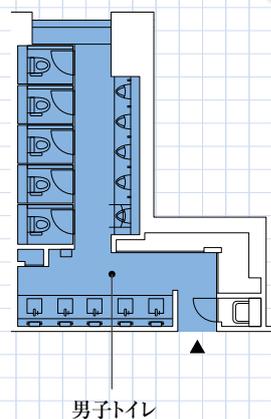
女子・多機能トイレ平面図

1/200



男子トイレ平面図

1/200



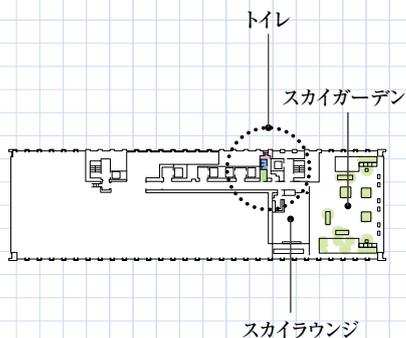
エントランス前。四季折々の植物で緑がたえない。



デザインが多い。女性社員が安らげる大切な場所であるトイレだけはきちんとつくりたいと思っ
ています」
男女トイレともホテルと見ま
がうような上質な空間だが、と
くに目を引くのは女子トイレの
充実ぶり。外光が入る洗面コー
ナーとは別に、光源が点々と鏡
を囲んだいわゆる「女優ミラー」
を個別に配したパウダーコーナ
ーを設け、さらに奥にはカーペ
ット敷きの独立したフィッティ
ングルームまで確保している。

21F フロア平面図

1/2,000



「ブーアの壁面に設置するフ
ッティングボードは安定が悪い
し、便器のそばで着替えたり搾
乳したりするのは抵抗がある
という女性が多い。ここではそ
うした声を反映し、無理を言っ
てドライとウェットのエリアを分
けていただきました」とは仲神
さんの弁。
浅見さんによれば、当初はパ
ウダーコーナーをトイレの中央
にアイランド型に配し、全体を
一体につなぐことで外光を奥ま
で導き、広がりをもたせたプラ
ンを考えていたが、仲神さんの
提案でトイレとパウダーコーナ
ーを分離した結果、むしろ開口
部は上部だけを高窓として生か
し、下は洗面カウンターと鏡を
設置するため、割り切って塞い
だという。
「僕たち設計者は、せつかく開
口部があるなら最大限あけて光
を取り込もうと考えがちですが、

撮影／雁光舎



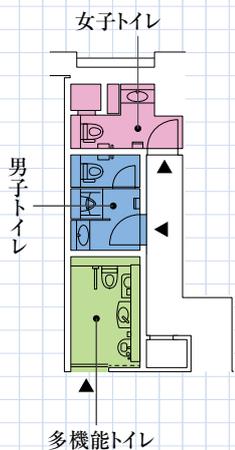
各フロアに設置されたリフレッシュコーナー。



エレベータホール。窓際に植栽。

トイレ平面図

1/200



本社のトイレを 実験台にした

仲神さんからエリアを分けたい
という話が出て、いろいろ試行
錯誤するうちに今の案が浮上し
たんです。窓の外には隣のビル
がせまっただけで眺めが楽しめる
わけでもなく、採光もハイサイ
ドライトだけで十分ですし、ゾ
ーンが明快に分かれ、結果的に
非常によかったと思います」

聞けば、東急不動産は目下、
本社ビルの建て替え中だが、解
体前の社屋のトイレを改修し、
高さや形状の異なる洗面台を数
種類設置するなど、さまざまな
実験を行い、社員に事細かにア
ンケートをとったそうだ。
そこからひろった女性社員の
要望が今回のトイレには数々生
かされているという。前述のフ
ィッティングルームに加え、ハ

ンドドライヤーとパータオ
ルをあえて両方設置したのも、
その一例。ハンドドライヤーだ
けでは水が十分切れない、ペ
ーパーがあると化粧直しにも使
えて便利だと、女子社員にはペ
ーパーオル派が圧倒的に多かっ
たとのこと。

それにしても、緑をふんだん
に取り入れた建物内外の各ス
ペース、テナント専用で朝食まで
提供するラウンジ、ホテルや百
貨店に匹敵する充実したトイレ
など、賃料がとれないスペース
である共用空間がここまで充実
したオフィスビルが実現する
とは、隔世の感がある。東急不動
産とK A J I M A D E S I G N
は今もタッグを組み、さらなる
大規模なビルを複数計画中だ
という。
次はトイレを含め、どんな共
用空間で私たちを驚かせてくれ
るのか、楽しみに待ちたい。

日比谷パークフロント

HIBIYA
PARKFRONT

建築概要

所在地	東京都千代田区内幸町2-1-6
事業主	グリーンアセットインベストメント 特定目的会社
主要用途	事務所・飲食店舗・ 物販店舗・駐車場
プロジェクトマネジャー	東急不動産
基本計画・デザイン監修	日建設計
基本設計・実施設計	KAJIMA DESIGN
施工	鹿島建設
敷地面積	6,089.61㎡
建築面積	3,197.29㎡
延床面積	67,123.88㎡
階数	地下4階、地上21階、塔屋1階
構造	CFT造 (一部鉄骨鉄筋コンクリート造、 鉄筋コンクリート造)
駐車場	132台
設計期間	2012年12月～2015年4月
工事期間	2015年5月～2017年5月

おもなTOTO使用機器

オフィス基準階(3～20階)

●男子トイレ/女子トイレ

壁掛大便器 C473P

ウォシュレットP TCF585Y

ベッセル式洗面器 LS715

自動水栓(電気温水器一体形) TENA12ELV1

ハンドドライヤー-高速両面タイプ TYC420W

●男子トイレ

壁掛小便器 UU500

手すり TH12CU2

●多機能トイレ

多機能ユニット

スカイラウンジ(21階)

●男子トイレ/女子トイレ

自動水栓 CET900T(CERA)

オートソープディスペンサー

CEA0120(CERA)

●多機能トイレ

多機能ユニット

スカイラウンジ

撮影
/ 雁光舎

日比谷公園を一望できるスカイガーデンに隣接。朝食サービスを利用することができる。

スカイガーデン



写真右/ガーデンからの眺望。ランチやミーティングなど幅広い用途で利用できる。左/俯瞰。周囲に高層ビルが少なく、開放的。

多機能トイレ



コンパクトなスペースに必要な器具を設置。オストメイト対応。

男子トイレ



ホテルライクなトイレ空間。右から大便器、小便器、洗面コーナー。

女子トイレ



顔を明るく映し出す、照明を内蔵した鏡を使用している。

Nakagami Shiho

東急不動産 都市事業ユニット
都市事業本部 ビル事業部
事業企画グループ
グループリーダー

仲神志保

Asami Kunikazu

鹿島建設 建築設計本部
建築設計統括グループ
グループリーダー

浅見邦一

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、それぞれの土地柄、
会社の性格、そして会社をリードする
人物の性格、マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

暮らしながら、健康になる家

代表取締役会長

旦康次郎 さん

アイレストホームの会長を務める旦康次郎さんが住宅業界に入ったのは、20代半ばのこと。「これからはもっともっと住宅が必要とされるが、国民の家を日本の木でつくったら、国中の山が丸裸になってしまう。これからは工業化住宅だよという知り合いの言葉にだまされて(笑)」自動車会社から転職。当時、まだ創業数年だった工業化住宅のハウスメーカーの営業マンとなつた。時代は高度成長期。たちまち頭角を現した旦さんは、やがて中四国を統括するまで出世の階段をのぼることになる。

直感的に 化学物質の 危険性を察知した

しかし順調に販売実績を積み上げながらも、旦さんには気がかりなことがあった。それは担当1棟目の引き渡しの際に感じた家のなかのにおい。幼い頃を岡山の大自然のなかで過ごした

旦さんには、直感的に健康によいものとは思えなかったのだという。そうした懸念を払しょくするため、責任のある立場になってからは使用する建材などにも気を配るが、大企業に成長した会社のなかで、できることには限界がある。そう気づいた旦さんは47歳のときに25年間勤めた会社を退社。1990年にアイレストホームを立ち上げた。

化学物質を 無害化する 建材との出会い

アイレストホームの仕事の中心は戸建て注文住宅。創業後数年、不動産事業を手がけていた強みを生かして、土地を入手したうえで戸建て分譲、マンション分譲なども行っている。そして、いずれの仕事でも共通してアイレストホームの大きな特徴となっているのが「健康住宅」というキーワードだ。長年、旦さんがこだわりつけてきた人

体に害を与えない家づくりを追い求めたものである。

「ヨーロッパではもう10年以上も前から3万種類の化学物質を規制しているのに、日本ではいまだにたった2種類の規制しかない。人が摂取する物質は約83%が空気中からといわれていますから、日常を過ごす家の空気が化学物質だらけでいいはずがありません」

90年代、いわゆるシックハウスが問題となり、2003年になってシックハウス対策のため建築基準法が改正された。現在も、この基準に沿って建築すればシックハウス対策をしたことになるのだが、旦さんはそれだけではまったく不十分だと言いきる。そんな旦さんが出会ったのが、カイケンコーポレーションが扱う「幻の漆喰」音響熱成木材「竹炭入り清活畳」の3点セット。いずれも健康自然建材と銘うつが、なかでも「幻の漆喰」は光熱触媒作用によって



半永久的に空気中の化学物質を吸着・分解し、無害化する特性をもつという。これらを全面的に組み込むことで健康住宅「エアリード」をブランド化する。

心地よい空気環境が リフォームでも人気に

カイケンコーポレーションは、全国の工務店と取引があり、「幻の漆喰」などもエアリードの専売ではない。だが、アイレストホームが他社と異なるのは、その効果を積極的に自分たちでも実証している点にある。たとえば、国が推奨するF☆☆☆☆建材でつくった部屋と、エアリードの部屋を比較して、エアリードで15分ほど過ごしただけで人の体温が上がることを示す。体温が免疫力などに影響することは広く知られており、エアリード内で過ごすだけで免疫力もアップすることを謳う。

依頼の状況を聞くと、戸建て住宅の顧客はとくに健康にこだ

写真上／1階和室。
下／中2階に設けられたライブラリー。
1階から2階に空気が通り抜ける設計。

だん・やすじろう／1941年兵庫県生まれ。63年に岡山セキスイハウスに入社。66年より積水ハウス。岡山・倉敷営業所長、広島営業所長、中四国統括営業部長を歴任。90年にアイレストホームを設立。シックハウスの経験から、化学物質を使わない自然素材の家の必要性を感じ、健康住宅「エアリード」シリーズなどを開発している。

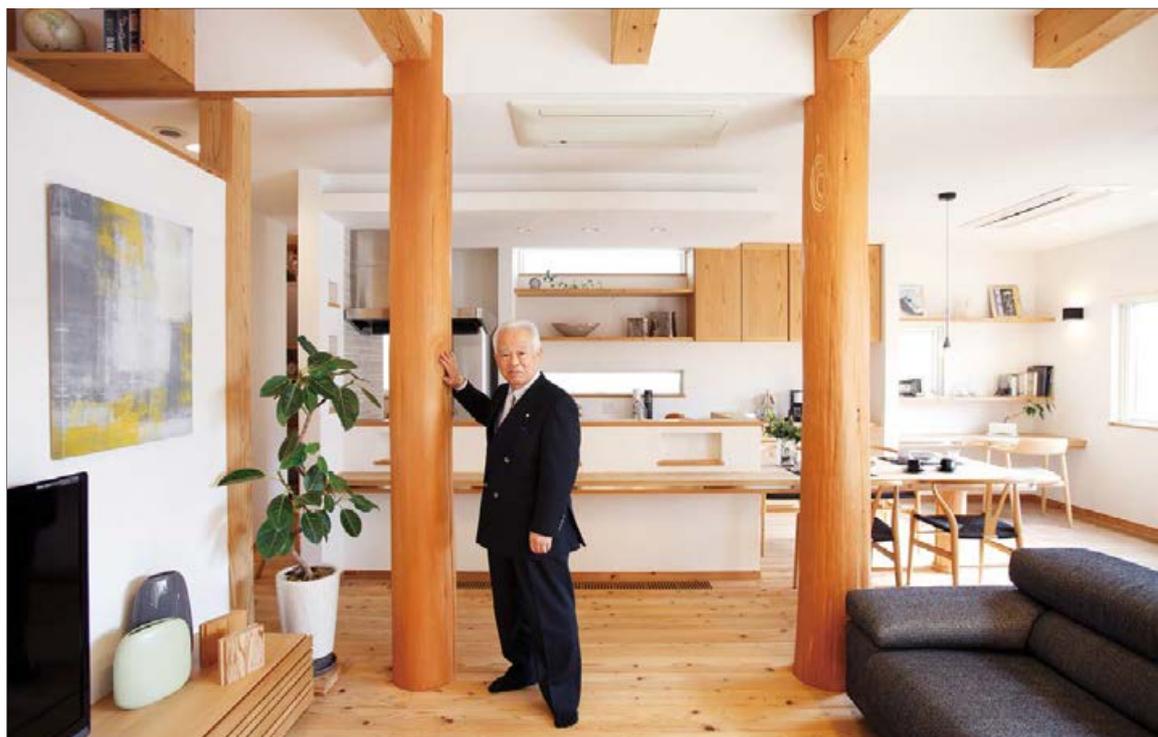
Dan Yasujiro



Irest Home

アイレスト
ホーム

- 会社名
アイレストホーム(株)
- 本社所在地
広島県広島市中区中町9-9
- 電話
082-543-2111
- 代表取締役会長
且 康次郎
- 会社設立
1990年
- 従業員数
38名
- 事業内容
注文建築設計・施工/
分譲住宅・不動産の
販売および仲介/
健康住宅の研究・開発/
宅地開発/
分譲マンション開発/賃貸業
- 売上高
20億1,900万円(2017年6月期)
- URL
<http://www.irest.jp>
- TOTO使用機器
・浴室
ハーフバスルーム



1階LDK。中央に2本の杉の親父柱。柱のそばに立つ、会長の且康次郎さん。

日常を過ごす家の空気が、化学物質だらけでいいはずがありません。



2階主寝室。奥に畳コーナー。床や建具には焼杉を使用。



1階浴室。ハーフバスルームで、壁一面を杉材にした。

わる人たちがばかりではないという。ただ、モデルハウスを訪れて「なんとなくこの雰囲気は気に入ってもらえる」というのは、科学的な裏付けを待つまでもなく、心落ち着く空気感や凹凸のある浮造りの床材の感触など、いわゆる五感が刺激されて高評価につながっているのはまちがいない。これらが注目されて、保育園や幼稚園の改修、あるいはマンションリフォームの依頼も少しずつ増えており、今後の大きな可能性を感じさせてくれる。

戦時中の空襲を逃れて岡山の山村に疎開した、正義感と腕っぷしの強かった少年も、今年喜寿を迎える。5年ほど前に社長の席は息子の壮之助さんに譲ったが、自らが立ち上げたアイレストホーム代表として、まだまだ会社をけん引する意欲は衰えていない。

取材：文/市川幹朗 写真/山下恒徳

新商品開発物語

「コンパクト多機能トイレパック」

2018年2月1日発売

「どこでも多機能トイレ」時代へ。

車いす使用者やお子さま連れの方の行動範囲を広げたい……。小さな施設の限られたスペースにも多機能トイレを増やすため、TOTTOが取り組んだのは機器のコンパクト化。独自のコンセプトと細かい配慮をつくした新製品について、ふたりの開発者がご紹介いたします。

コンパクトな

多機能トイレが 求められている

——多機能トイレはなぜ生まれたのですか。
佐藤俊博 多機能トイレというのは、そもそも車いす使用者に使っていたただために開発されました。海外にもあるのですが、日本ではその広いスペースを有効活用しようというので、オストメイト対応の器具や赤ちゃんのおむつ替えの場所などが設置されるようになったのです。

——駅やデパートなどで本当によく見かけるようになりました。でも車いす使用者やおストメイトの方からは「もっと自分たちが使えるトイレを整備してほしい」という要望が出ているそうですね。

高塩康洋 アンケート（*1）によると、コンビニやスーパーなど中小規模の施設にも多機能トイレを設置してほしいという声が多くなっています。

——まだまだ数が足りないですね。

高塩 バリアフリー法の建築設計標準（*2）では、車いす使用者が使うトイレは、2000mm角というサイズを基準として設定していますが、小規模施設などでは、その広さはなかなか確保できません。そこで2012年に「コンパクト多

さまざまな機能の 組み合わせが 可能に

機能トイレパック」が誕生しました。さらに、昨年の建築設計標準改正で小規模施設や既存建築物などへバリアフリートイレの設置が推奨されるようになったため、コンパクトな多機能トイレのニーズはますます高まると思います。

——小さい建物にもどんどんつけてくださいということですね。では今回のリニューアルのポイントは何？

佐藤 一つひとつの器具をぐっと小さ

くしたことで、従来の「コンパクト多機能トイレパック」より、さらにコンパクトになりました。車いす・オストメイト対応で1900mm×1700mm。器具の下に空間をたっぷり設けているので、車いす使用者の動線を邪魔しません。

高塩 それともうひとつ。器具のサイズもほぼ統一したので、いろんな機能の組み合わせが可能になりました。

——ということ。

高塩 たとえば、最近の傾向として、多機能トイレをお子さん連れのお母さんが利用されることが多くなっています。一般トイレだとベビーカーが入らないんですね。そこで、乳幼児連れに便利な機能を揃えたプランも開発しました。

TOTO株
衛陶開発第一部
衛陶開発
第二グループ

佐藤 俊博

Sato Toshihiro

さとう・としひろ/1989年福岡県生まれ、神奈川県育ち。2015年に名古屋大学大学院修了後、同年にTOTOに入社。TOTOサニテクノにて、大便器の成形工程に従事。16年より現職。新商品では陶器の性能とコンパクト化を担当。

ベビーチェア+ フィッティングボード



オストメイト
汚物流しの
試作モデル

オストメイト汚物流し

TOTO株
トイレ空間生産本部
トイレ空間商品開発部
トイレ空間パブリック
商品開発グループ

高塩 康洋

Takashio Yasuhiro

たかしお・やすひろ/1980年栃木県生まれ。2005年に東洋大学大学院修了。同年TOTOに入社。15年よりトイレ空間生産本部。パブリックトイレのユニバーサルデザインにおける使用者の動作研究、商品の企画提案に従事。15年より多機能トイレの開発に携わる。新商品では、車いす使用者の利用動作と空間全体の寸法計画を担当。

商品情報



コンパクト多機能 トイレパック

乳幼児連れ対応セット

UADBK61R1A1ADD2B
2,517,300円(税・工事費別)



コンパクト オストメイト パック

UAS81RDB2NW
614,100円(税・工事費別)

商品を見る

TOTOテクニカルセンター（東京、大阪、名古屋、福岡）にて、商品をご覧いただけます。担当セールスマンまでお申し付けいただくか、ホームページにてお申し込みください。

<http://www.com-et.com>

——お母さんにはうれしいですね。

佐藤 イクメンのパパにも便利です(笑)。

高塩 百貨店などの商業施設では紳士服、子ども服……とフロアによって客層が違いますので、今回の「コンパクト多機能トイレパック」なら、客層に合わせて設備を変えることができます。お子さんに配慮したプランなら子ども服売り場にぴったり。異なる機能を入れられるため、とても喜ばれると思います。

佐藤 器具を小さくすることで、表現できる幅が広がりました。さまざまな機能の組み合わせパターンをご提案できるようにになりました。

コンパクト、

だけど使いやすい

器具

幅を従来の450mmから340mmに狭めて、限られたスペースにも対応できるようにしました。

使い勝手を変えたくなかったので、床から陶器上端までの高さはそのままに、陶器部分の高さをおさえ、下の空間をたっぷりとっています。下が広いと、車いすを動かすにも、オストメイトの方が姿勢をとるにも使いやすいのです。

——ずいぶん小さくなりましたね。

佐藤 少ない水量でしっかり汚物を流しきる。その技術を確立するのに一番苦労しました。本来、洗浄水は横方向に吐水されますが、汚物を流すには縦方向の流れが必要。つまり、横から縦へ、水流を制御しなければなりません。

新商品は幅を狭くした分、制御するための空間が少なくなります。しかも、以前は楕円だったボウルが真円に近くなったので、遠心力でさらに横方向の力がはたらくのです。

そこで、吐水口まわりの形状やボウルの流れの実験を重ね、さらに、縁にオー

バーハングを設けることで、水あふれの心配なくボリュームのある水の流れをつくり出しました。効率的な水の流れを生み出すことで、洗浄水量も8Lから4・8Lへ大幅に減らすことに成功しています。

TOTO独自の お子さま配慮型 パッケージ

——お子さま連れ向けのパッケージは、TOTO独自のものですか。

高塩 そうです。お母さんたちにヒアリングしたところ、お子さんの成長に

よっておむつの替え方やトイレの使い方が変わってくるのがわかったのです。そこで、ベビーチェア、フィッティングボード、ベビースートの3点をセットにして、成長に合わせて使い分けできるようにしました。

——ベビーチェアとフィッティングボードを一体にしたのは。

高塩 3つの器具を入れようとするとスペースをとるため、優先度の低いフィッティングボードが採用されにくくなっています。しかしベビーチェアやシートとともに絶対に必要なので、ベビーチェアの下の空間を活用して一体型の器具を開発しました。

——ベビーチェアは、従来と異なり大便器のすぐ横に置かれています。

高塩 一番重視したのは、お母さんとお子さんの距離を近づけること。目線が合う、手が届くことで安心できる、そんな位置関係にしようと考えました。

——なるほど。

高塩 一方で、ベビーチェアの位置を変えると、いろいろな器具がお子さんの周囲にあるので、ついついたずらしたり、手や足をはさんでしまったりしますよね。

そこでやわらかい素材の背もたれとガードを設けました。包み込むとともに部材の角度などを細部に至るまで計算して、安全に、そして安心できる場所にお子さんを座らせられるようにしたんです。左右のガードが斜めにカットしてあるのは、お子さんを座らせるときに肘がひっかからないようにという配慮です。

New Product Story

Interview
with
Takashio Yasuhiro and
Sato Toshihiro

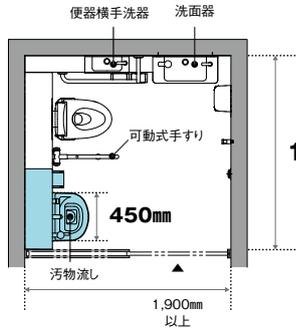


コンパクトになった多機能トイレ

車いす・オストメイト対応セット

縮尺1/70

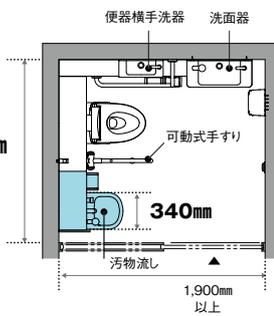
従来品



1,800mm以上 → 1,700mm以上

幅が100mmコンパクトになりました。

新商品

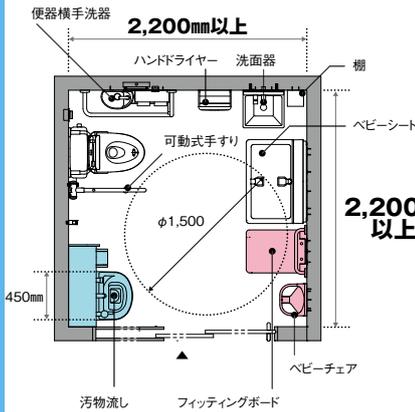


乳幼児連れ対応セット

縮尺1/70

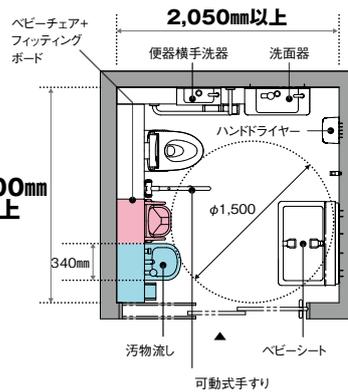
従来品

(在来工法プラン)



2,200mm以上 → 2,000mm以上

新商品



——どのようところで採用されるんでしょう。

高塩 私の想いとしてはまず牛井屋さんに入れてもらいたいな、と(笑)。

——安心してお出かけできますね。ところで、海外には多機能トイレはあまりないのでしょか。

高塩 ないですね。アメリカやイギリスでも車いす使用者への配慮が中心です。佐藤 オストメイトの方は日本と比較にならないほど大勢います。今後はぜひ海外進出も視野に入れていきたいです。

高塩 大きい施設に多機能トイレがあることも大切なのですが、どこに行ってもある。それを日本の文化として発信できたらすばらしいと思います。

*1「公共トイレの利用状況アンケート調査」(2011)2013年、TOTOTO調べ
*2「高齢者、障害者等の円滑な移動等に配慮した建築設計標準」国土交通省(2017年)

コンパクト化のポイント

ポイント ①

オストメイト 従来より幅を狭めた分、縁のオーバーハングで水あふれを防ぐ。



オーバーハング

ポイント ②

ベビーチェアとフィッティングボードを一体化

ベビーチェアの下の空間を利用。おむつ交換に便利。



ポイント ③

車いす使用者の動作に配慮 器具のコンパクト化で方向転換の際の足下空間を確保。



カタログのご請求

詳細は「バリアフリーブック(No.94)」「トイレパックカタログ(No.707)」をご覧ください。カタログをご希望の方は、本誌に同封の「TOTOTO通信2018年春号アンケート用紙」にご記入のうえ、ファクスまたはWEBにてお申し込みください。

FAX 093-571-0999

お問い合わせ

商品の技術的なご質問は、技術相談室ナビダイヤルまでお問い合わせください。

ナビダイヤル 0570-01-1010

Discovering New

Akihisa HIRATA

平田晃久氏は、建築を「生成する生命活動の一部」ととらえ、植物・生物・気象現象などの有機活動をつかさどる摂理を建築に取り込むことで、建築の本来のあり方を模索してきました。

「建築とは〈からまりしろ〉をつくることである」というコンセプトは、建築が一個体としての役割を超えて、生きている世界の一部となる可能性を見出すものです。本展では、平田氏の現在の建築活動を紹介します。



Taipei Complex

©Yukikazu Ito

Discovering New

文／平田晃久（建築家、京都大学准教授）

私たちの建築は、建築やその背後にある人間の営みを、広義の生命活動としてとらえ直すところから始まる。そのとき、公共建築すら、多様な人々を異なる「生物種」と読み替えたある種の「生態系」となるだろう。

そのためには、手がかりとなるなんらかの考え方、生命の営みと建築をつなぐ新しいラインを見つけなければならない。この展覧会では、そのような思考のラインとその交錯を、模型を含むさまざまな事物の立体的配列で体験的、博物学的に示す。

新しいことは、生命の本質にある何かである。生きていることは、変化しつづけることだからだ。生命力は、つねに更新されるものにこそ、宿るだろう。

とはいえ、ここでいう新しさとは、過去と断絶した完全な見知らなさ、ではない。むしろ、すでにそこにあるが、いまだ隠されたものを、顕在化させる何かだ。だから私たちは、何もないところから創造したり、発明するというよりは、何かを発見し「discover」することを通して建築をつくりたいと思うのだ。

新しいかたち

たとえば、花のあいだを蝶が飛んでいるとき、そこにある立体的なフィールドは、植物がつくるふわふわとした隙間だらけのかたちによってつくり出されている。このようなあいまいで立体的なかたちを言葉にすること。（「からまりしろ」というコンセプトはそんな考えから生まれたが、単にかたちの水準の問題を超えて、多様に展開することになった。他方で、このような新しいかたちそのものの問題を、きちんと記述しておく必要もある。この展覧会では「側」「ひだ」「ライン」「階層」という言葉で、新しいかたちを発見する建築の試みを照らし出す。

新しい自然

上空から眺めると、建築や農耕を行う人類は、地表面を発酵させる微生物のようでもある。人の営みは自然の一部である。

次回 予告

藤村龍至展 「ちのかたち」

独自の理論で建築設計とまちづくりを展開する、藤村龍至氏の個展を開催。他者の意見を取り込みながら、建築家の作意を越え、プロジェクトごとに最適な解を見出していく氏の設計のプロセスに着目し、多数の模型や映像を通して紹介。ポストインターネット時代における建築について、氏のビジョンを提示します。

会期
7月31日(火)～9月30日(日)
講演会
8月9日(木)／イノホール

TOTO ギャラリー・間

所在地
東京都港区南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル3F
電話／03(3402)1010
ファクス／03(3423)4085
開館時間／11:00～18:00
休館日／月曜日・祝日
入場料／無料
アクセス
●東京メトロ千代田線
「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分
●都営地下鉄大江戸線
「六本木」駅下車 8番出口徒歩6分
●東京メトロ日比谷線
「六本木」駅下車 4a出口徒歩7分
●東京メトロ銀座線・
半蔵門線、都営地下鉄大江戸線
「青山一丁目」駅下車
4番出口徒歩7分



TOTO GALLERY MA

<https://jp.toto.com/gallerma>

会期／2018年5月24日(木)～7月15日(日)

平田晃久

Hirata Akihisa



©Luca Galino

ひらた・あきひさ／1971年大阪府出身。94年京都大学工学部建築学科卒業。97年京都大学大学院工学研究科修了後、伊東豊雄建築設計事務所勤務。2005年平田晃久建築設計事務所を設立。15年より京都大学准教授。工学博士。

おもな作品に「榊屋本店」(06)、「Bloomberg Pavilion」(11)、「Kotoriku」(14)、「太田市美術館・図書館」(17)など。第19回JIA新人賞(08)、Elita Design Award(12)、第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞(12年、日本館協働受賞)、日本建築設計学会賞(15)など受賞多数。著書に「現代建築家コンセプト・シリーズ8 平田晃久 建築とは(からまりしろ)をつくることである」(11年、LIXIL出版)など。16年にはニューヨーク近代美術館(MoMA)にて「A Japanese Constellation」展に参加。

講演会

平田晃久講演会

Discovering New

日時

2018年5月31日(木)

18:30～20:30

会場

イノホール

(東京都千代田区

内幸町2-1-1

飯野ビルディング4F)

定員

500名、参加無料

参加方法

事前申し込み制

TOTOギャラリー・間

ウェブサイトより

お申し込みください。

申し込み期間

5月8日(火)まで



太田市美術館・図書館

©Daichi Ano



Tree-ness House

©Vincent Hocht

新しい コミットメント

る。しかし、たとえばミスが見据えた絶対的に均質な空間のように、私たちが親しみを感ずる「自然」とは対極を標榜する人工物も生み出す。とはいえ、そんな極北の世界すら「自然」の一部であることに変わりはない。

そこにあるのは自然／人工の対立ではなく、生／死の対立ではないだろうか。この対立軸上で「生きている」ことをグラデーショナルにとらえること。そこに新しい「建築の自然」を見出すきっかけがある。「生の度合」「創発的」「発酵・浸食」という言葉がガイドになるだろう。

私たちが目指す「新しさ」は、人間というものを即物的な視線でとらえ直したときに、

生きている世界のありようのなかに発見される、ということもできる。それは、人間がつくり上げてきた意味や慣習や社会のありようをかつこに入れ、「人間から離れる」ことと引き換えに見出される新しさである。

しかし、人間の社会的営みが、生きている世界の一部であることと変わらないとしたら、いったん「人間から離れる」ことによって獲得された新しい建築のアプローチは、再び「人間と出会う」ことができるのではないだろうか。「土」「汎ローカリテイ」「他者」「履歴」という新しいコミットメントに向けた手がかりを示したい。

News File

TOTOの最新情報

「KBIS 2018」での展示の様子。



TOTO News **4** ↓

「リモデル あんしん宣言」を 発表しました

TOTOは、「リモデル宣言」(1993年)、「リモデル新宣言」(2003年)に続き、15年ぶりにリモデルの新たな宣言を発表しました。スローガンは「リモデルにもっと“あんしん”を」。

お店選びや費用など、お客さまにとってはわからないことだらけで、さまざまな不安がつきまとうリフォームに対して、知りたい情報を“みえる”ようにし、“わかる”という“あんしん”を実感できるようにします。

リフォームの一步先を目指すTOTOの「リモデル」の思想に、“あんしん”をプラスし、お客さまの不安を解消することで、リモデル需要を喚起します。

<https://jp.toto.com/reform/about/anshin>



「TOTOあんしんリモデル」のシンボルロゴマーク。

TOTO News **3** ↑

北米最大級の展示会 「KBIS 2018」に 出展しました

TOTOは、2018年1月にフロリダ州・オーランドで開催された北米最大級の水まわり展示会「KBIS 2018 (Kitchen and Bath Industrial Show)」に出展しました。

展示テーマは『Life Anew』。「TOTOの水まわり商品はまいにち誰もが使うもの。世界の暮らしを、つねに新しく豊かにするために。今日のTOTOを超え、これからも挑戦をつづけていく」というメッセージを、2017年3月にドイツで開催されたISH(*1)、同5月に中国で開催されたKBC(*2)に続き、米国で発信しました。

「KBIS 2018」では、日本国内で先に販売を開始した「ネオレスト NX」など、機能とデザインを融合した商品を数多く展示しました。

*1 ISH (International Sanitary and Heating) は2年に1度、ドイツで開催されている世界最大級の住設展示会です。

*2 KBC (Kitchen & Bath China) は年に1度、中国で開催されているアジア最大級の住設展示会です。

TOTOミュージアムの外観。



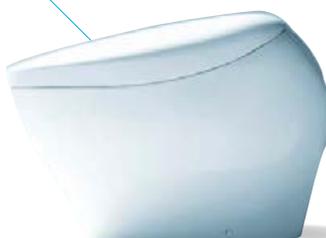
TOTO News **2** ↓

「ネオレスト NX」 を含む3商品が 『iFデザイン賞2018』 を受賞しました

ウォシュレット(*) 一体形便器「ネオレスト NX」と「台付シングル混合水栓 ZLシリーズ」「ベッセル式洗面器」が、国際的に権威のあるデザイン賞『iFデザイン賞2018』を受賞。TOTOの“機能とデザインの融合を目指したものづくり”の成果が高く評価されました。「ネオレスト NX」は、2017年8月に世界に向けて発信する次世代トイレ、フラッグシップモデルとして発売し、ホテルや商業施設、ホテルライクな住宅など、上質な空間を追求するお客さまにおすすめしています。

* 「ウォシュレット」はTOTOの登録商標です。

『iFデザイン賞2018』を受賞した「ネオレスト NX」。



TOTO News **1** ↑

TOTOミュージアムが 「第58回BCS賞」を 受賞しました

TOTOミュージアムはこのたび、一般社団法人日本建設業連合会の「第58回(2017年)BCS賞」を受賞しました。BCS賞は「優秀な建築物をつくり出すためには、デザインだけでなく施工技術も重要であり、建築主、設計者、施工者の三者による理解と協力が必要である」という考えのもと、国内の優秀な建築物に対して表彰を行うものです。

TOTO所有の建築物としては、保養施設であるTOTOシーウィンド淡路(1999年)に続いて、2度目のBCS賞受賞となります。今回は、建築主のTOTO株式会社、設計者の株式会社梓設計、施工者の鹿島建設株式会社の3社に対して授与されました。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

<https://jp.toto.com/publishing>

TOTO出版のお知らせ

セラトレーディングのお知らせ

Book

1

『Akihisa HIRATA
Discovering New』

同封の
『TOTO通信アンケート』に
お答えいただいた方
なかから、
抽選で10名の方に
プレゼントいたします。

注目の「太田市美術館・図書館」など意欲作が立てつづげに竣工し、ますます注目を集める建築家・平田晃久氏。本書は自然界の秩序を建築に応用するなど、独自の建築論と、豊富な作品写真と詳細な図面を堪能できる作品集。小さな家具から大規模な集合住宅、複合施設まで、つねに今までにない新しい発想で建築を提案してきた、平田作品の魅力に触れられる1冊です。

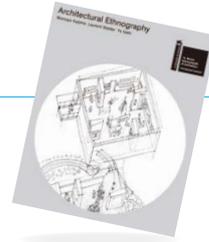
著者 平田晃久
定価 4,300円+税(予定)
体裁 A4判変型(220×287mm)、
ハードカバー、
280ページ(予定)
発行日 2018年5月23日

*表紙は変更の可能性あり

Book

2

『建築民族誌』



本書は、イタリア・ヴェネチアを舞台に隔年で開催される建築の祭典『第16回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展』(5月26日～)の日本館カタログ。今回のキュレーターチームは、建築にみられる暮らしを生活者側の視点で描いたスケッチや絵画、図面を「建築民族誌」としてとらえることで、21世紀の建築像の照射を試みている。本書はその理解として図解形式でさまざまな事例を紹介する。

著者 貝島桃代、
ロラン・シュトルダー、井関悠
定価 1,500円+税(予定)
体裁 B5判変型(168×210mm)、
ソフトカバー、200ページ(予定)
発行日 2018年5月

*表紙は変更の可能性あり

キッチンシンクに
「HARMONY」
シリーズが
加わります

セラトレーディングでは、春の新商品として、スイス・FRANKE(フランケ)社のキッチンシンク「HARMONY」シリーズを発売します。シンプルなデザインながらも高機能なステンレスシンクで、海外キッチンブランドにも数多く採用されています。キッチンシンクでは珍しく水溜めも可能。深さもあるため、ワインを冷やすなど、おもてなしの準備の際にも活躍します。デザインはもちろん、機能面も十分なFRANKE社のキッチンシンクで、理想のキッチン空間を叶えるお手伝いをいたします。

セラトレーディングの
「総合カタログ」をご希望の方は、
ファクスにてご請求ください。
WEB/<https://www.cera.co.jp>
FAX/03-3402-7185



HARMONY
シリーズ
キッチンシンク
FR21072
●希望小売価格:
92,500円(税別)
2018年5月
発売予定

Information

『TOTO通信』
定期購読を
ご希望の建築家を
ご紹介ください。

お申し込みはTOTO通信データ管理室まで

tel

093 (513) 6234

e-mail

toto_tsushin@jlink-net.com

*法人あての送付となります。

Bookshop TOTO

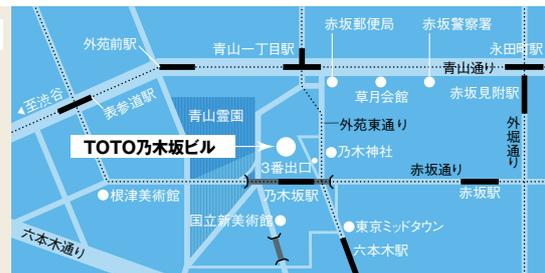
●所在地/東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階
●電話/03(3402)1525
●定休日/日曜日・月曜日・
祝日・「TOTOギャラリー・間」
休館中の土曜日・
夏期休暇・年末年始

TOTO出版

●所在地/東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル2階
●電話/03(3402)7138
●ファクス/03(3402)7187
全国の書店でお求めください。
直営店Bookshop TOTOでも
お求められます。書店遠隔
の方はお問い合わせください。

セラトレーディング

●所在地/東京都港区
南青山1-24-3
TOTO乃木坂ビル
●電話/03(3796)6151、
03(3402)7134
(東京ショールーム)
●ファクス/03(3402)7185
●定休日/月曜日・祝日・
夏期休暇・年末年始



アクセス/●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線・都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2018年7月上旬発行の予定です。

TOTO通信 2018年 春号 第62巻・第2号 通巻518号
発行日: 2018年4月1日 発行所: TOTO株式会社 マテリア推進部
〒105-8305 東京都港区海岸1-2-20 汐留ビルディング24F TEL.03(6836)2172

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植物性・森林系材料などを使用している。また、この情報誌には植物性・森林系材料などを使用している。また、この情報誌には植物性・森林系材料などを使用している。



NEOREST NX



ZL series
lavatory faucets
3variation



Washbasin
4variation

3 products

win
iF DESIGN AWARD 2018



【iFデザイン賞2018受賞】

ウォシュレット一体形便器 ネオレスト NX
台付シングル混合水栓 ZL シリーズ
ベッセル式洗面器

TOTO技術相談室 電話:0570-01-1010 受付時間:〈平日〉9:00~18:00 〈土曜日〉9:00~17:00(日・祝・夏期休暇・年末年始を除く)
専門家コーナー「COM-ET」<http://www.com-et.com> TOTOホームページ <https://jp.toto.com>

※ベッセル式洗面器は単品での日本国内販売はございません
※商品詳細は、TOTOホームページをご覧ください

『TOTO通信』のお届け先などの変更はお客様No.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室 TEL.093(513)6234 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客様からお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(<https://jp.toto.com>)をご覧ください。